

2021年8月21日

池上 惇 先生
米寿お祝いメッセージ集

<企画・編集>

働学研（博論・本づくり）研究会

目 次

発刊の辞	中谷 武雄
お祝いメッセージ集の企画と寄稿の呼びかけ	十名 直喜
「池上惇先生米寿お祝いメッセージ集」への寄稿のお願い	
「池上惇先生米寿お祝いメッセージ集」の企画と寄稿のお願い	
— 働学研2周年記念 —	
「池上先生との交流や思い出を語り合う」参加者座談会	
— 7/24 第23回働学研(博論・本づくり)研究会 —	
メッセージ — お祝い・感謝 & 仕事・人生	
池上先生の米寿を記憶の時として	広瀬 滋
池上先生との思い出	小野 満
3世代の連携力が生み出す研究という料理の妙味	片山 勝己
米寿お祝いの盛会を祈念	中野 正己
『資本論』学習や学生運動へのご支援に感謝	聴濤 弘
IT技術者からのお祝いと20代の誓い	澤 稜介
研究の励みとなる大切な宝物	杉山 友城
知の泉・池上惇先生の米寿をお祝いして	濱 真理
池上先生へのお祝いメッセージ	太田 信義
社会人大学院・人間発達の理論・農山村の未来に向けて	守友 裕一
— 長きにわたる学恩に感謝して	
壮大な研究史のご出版をぜひ!	的場 信樹
池上惇先生との出会い	熊坂 敏彦
文化経済学会での出会い&You Tube番組づくり	古畑 浩
森嶋通夫への導き	中西 康信
経済・財政、公務労働、そして文化・地域の視座に導かれて	岡田 重信
珠玉の助言に導かれての「働学研」半世紀	十名 直喜
米寿をお迎えになりましたこと、心よりお祝い申し上げます	横田 幸子

池上先生との出会いはセデンディビティ	富澤 公子
— 奄美研究での博士号授与と奄美での文化資本セミナー開催に感謝	
池上先生 米寿 おめでとうございます	槌田 洋
池上先生の文化遺伝子&構想を未来に活かす	木林 威夫
博士論文でのご指導を今後の糧に	古池 嘉和
池上惇先生の米寿に寄せて	小倉 信次
直伝の文化経済学を研究・教育に活かす	岩田 均
心に響く言葉「創造の根を発展させる」	井手 芳美
恩師から学ぶ池上惇先生の魅力と凄さ	程 縁紅
『学習社会の創造』にみる変わらぬ情熱の源泉	加藤 隆
芸術とエシカル消費の出会い	三輪 昭子
人間の復興と地域の再生の視点をまちづくりに生かす	古橋 敬一
層別研(1960-70年代)から働学研(21世紀)への継承・発展	中谷 武雄
— 半世紀を経て新たに芽吹く池上さんの思い	
知的刺激と激励、「一筋の光」に導かれて	古河 幹夫
内モンゴルに生きる「4世代にわたる学びの絆」	白 明
論文指導と日本経営学へのお導きに感謝	中野 健一
恩師に導かれての学び・仕事・研究人生	戸崎 肇
「個」に向き合う教育&研究指導を糧にして	菊地 裕幸
貴重なご指導を出版に活かす	高松 平藏
「マルクス・レノン主義」にたどりつけた幸せ	藤岡 惇
— 池上 惇さんの導きに感謝	
徳島県上勝町での現地指導と拙著への評価に深く感謝	松本 竹生
伝統産業研究へのご指導を博士論文&後進育成に活かす	安嶋 是晴
池上先生との思い出	外山 晴一
大学院生時代からの交流、素晴らしい時間に感謝	和田 幸子
答 辞	池上 惇
— 学部ゼミを原点に半世紀を超える学びの交流に感謝 —	
編集後記	十名 直喜

< 発刊の辞 >

中谷 武雄

池上惇先生のお誕生日は8月20日です。今年で満88歳です。相変わらずお元気で、米寿というおめでたい記念日を自ら節目にして、それに相応しいことをまた始めようと、毎日のようにいろいろな方とお会いし、議論をして、構想実現に向けて精力を傾注されています。今迄の活動基盤の1つであった一般社団法人文化政策・まちづくり大学校（通称市民大学院）の長年務めてきた代表理事を下り、万全の体制で臨まれようとしています。

市民大学院を引き継いだ者を中心に、新しい事業へのお手伝いもできる、そしてなによりも先生の今迄のご貢献に感謝をし、またお祝いを申し上げる機会を準備しようと数年前から相談をしてきていました。しかしながらあいにくのこのコロナパンデミックです。皆さんが集まってのお祝い会の開催がままならなくなりました。そこでオンラインでお祝い会を開催、ということに急遽相成りました。全くの初めての経験で不安も多くあります。デジタルには弱い連中が、若手の支援を得ながら、記念行事としてオンライン祝賀会、交流会を構想しました。基礎経済科学研究所と京都橘大学の関係者のご協力を得ました。

オンラインの祝賀会はアーカイブ化できても、それだけでは物足りない、何か紙での記念物も必要ではないか、というのが自然な声として沸き上がりました。しかしオンラインでの参加自由の場合へのメッセージの提供は、どのような人に、どのように呼びかければいいのか、なかなか名案が浮かばない、最終案を決めかねていました。そこに十名直喜さんが自ら名乗りを上げて、主催する働学研、役員を務める基礎経済科学研究所、国際文化政策研究教育学会にネットワークを通じて、お祝いメッセージ集作成への寄稿、支援を呼びかけていただきました。

呼びかけに応じて、中国やドイツからも、全国各地からも多くの方がメッセージをお寄せいただきました。お礼申し上げます。中には名前も初めて、顔も知らないどうしの方々が集まっています。池上さんとともに十名さんの人脈がなせる技でしょう。このことによって池上さんの世界の広さ、情け深い性格や様々な活動の多面性が、豊富な情報提供によって浮き彫りにされる、という思わぬ成果が生まれました。いちいちうなぎながら読み進めるという時間を、皆さんにもぜひ味わっていただきたいと思います。

十名さんはお一人でメッセージを集約し、形式を整え、編集（到着順?）していただきました。心からお礼申し上げます。この情報収集、処理能力の大きさ、費やされるエネルギー（それを惜しまないこと!）とともに、その効率性の良さに改めて感心しました。（適役であったかもしれません。）短時間で多くのメッセージを集め、冊子（形式）にすることができました。ひとまずは関係団体のHP、資料格納庫に掲載して公開し、紙媒体での活用も考えていきたいと考えています。この次に紹介する他の祝賀事業とも関連して、資金・予算計画が十分に立てることができていません。

他には、記念企画として、池上さんと池田清さん、金井萬造さんが中心となって継続されてきた三都物語研究会の成果を、『生命、自由、幸福の生活と地域づくり：京都、神戸、遠野・気仙の三都物語』として出版することになりました。この日に間に合うように頑張ってくださいました執筆者、編集者の皆様に感謝します。この冊子は、ご希望の皆様にはお届けします。

三都物語の1画を占める遠野・住田・気仙地域の岩手と交流し、そこに「ふるさと創生大学」を実現することが、この間に池上さんが最も精力を注ぎ、情熱を燃やして取り組んできた事業です。現地での頑張りに後方支援基地として京都で、市民大学院で活動してきたのが、金井萬造さんと越智和子さんを中心とする「遠野文化資本研究会」です。研究会に参加し、また現地を訪れた人が中心になって研究会の歩みをまとめようという話になりました。これにも岩手地域を中心に、多くの方々からお祝いメッセージを寄せていただきました。

また住田のふるさと創生大学の、この間の詳しい150件を超える活動記録がコピー集として送られてきています。ハードコピーでは数量的に限界が生じますから、デジタル化して、HPに掲載し、必要部数をオンデマンドで印刷できるような体制も作り上げたい、というのが新代表理事の金井さんの構想です。ご期待下さい。

池上さんは、腰の痛みも抱えながら、岩手、東京、その他の地域と交流しながら、各地のふるさと学校実現の実践活動に勤しみながらも、『文化資本論入門』（京都大学学術出版会：学術選書078、2017年1月15日）と、『学習社会の創造：働きつつ学び貧困を克服する経済を』（京都大学学術出版会：学術選書093、2020年10月20日）の2冊の本を公刊され、実践活動に裏打ちされた理論構築、新しい社会実現への提言、政策提示にもたゆむことなく励んできました。文化政策・まちづくり大学（ふるさと創生大学）学術データベースへの継続的な配信にも是非注目して下さい。二宮尊徳からラスキンまで、その対象領域が今なおさらに広がっているのには、ますますお元気としかいいようがありません。

この間の篤い思いは、それぞれの本の表紙に印刷された図版が象徴しています。前者にはウィリアム・モリス：野生のヒヤシンス（更紗カーテン地デザイン）、これは「生活の芸術化による社会進化」を目指して活躍したモリスへの賛歌と共感を可視化したものです。後者には「ふるさと創生大学・岩手・住田学舎」と「哲学の道（ふるさと農園）」の2枚の写真で、両方ともに住田に生活する人々が映し込まれています。

池上さんが提議する、文化経済学における「文化資本」と「文化資本の経営」の考えは、震災復興、復興支援の過程で、ふるさとと呼ばれる地域、コミュニティの中で自ら学習し、学びあい育ちあいながら、住みよい社会を作り出そうとしている人々と出会うことにより、「学習社会」を創造すること、実現することであるという結論に到達したと考えることができるでしょう。

池上さんは、現在、住田地域で把握された、コミュニティで培われてきた生活スタイル、人生の生き方と享受の追求を、文化資本を自然資本との関係において、地域の生態系と自

然環境の中での社会と文化の形成と発展として理論をさらに精緻化すること、そのために実践の場と組織を全国各地に創り出すことを2つの目標に、さらに頑張りたいと意気込んでおられます。子ども図書館の開設や、介護・医療関係との連携など、構想はさらに膨らんでいます。

こうした理論・学術面での貢献と、震災復興・地域活性化などの社会事業への貢献が広く認められて、池上さんは、一般社団法人・全国日本学士会（京都市左京区、<http://academic-soc.jp/>）が展開する事業として、アカデミア賞を昨年度授賞されました。受賞理由に、「財政学並びに文化経済学分野において数々の優れた業績をあげるとともに、その成果を社会に還元し、地域社会の貴重な文化を文化資本と位置づけ、地方と都市を結ぶ生涯教育と生涯研究の拠点とする「ふるさと創生大学」を立ち上げるなど、地域振興と生涯教育の発展に多大な貢献を果たした」とあります（国際文化政策研究教育学会 HP、トップ右上、学会通信、『国際文化政策研究教育学会通信』第1号、2021年2月15日、をご参照下さい。）

現職「京都大学名誉教授、一般社団法人文化政策まちづくり大学校代表理事」としての受賞は、学術面とともに、社会活動としての市民大学院をともしてきた私たちにとっても、大きな喜びでもあり、誇りでもあります。米寿記念会は、アカデミア賞受賞のお祝いも兼ねています。社会的な活動、実践が認められたことはなによりありがたい、というのが池上さんの感想でした。

私たちは、池上さんに、健康に十分に留意されて、息長く、精力的に、目標に向かって進まれていくことを期待するとともに、微力ながらも応援していきたいと考えています。

オンライン祝賀会に参加された皆さん、お祝いメッセージ集に言葉をお寄せいただきました皆さん、祝賀企画全般に関心を寄せ、励まし、支援をいただいている皆様にお礼申し上げます。そして池上さんを支えながらこれからも歩んでいく活動に理解を賜り、温かく見守っていただくことをお願いします。

(2021.8.12 市民大学院)

<お祝いメッセージ集の企画と寄稿の呼びかけ>

2021年7月29日（『国際文化政策』郵送時に同封）

「池上惇先生米寿お祝いメッセージ集」への寄稿のお願い

十名 直喜

池上惇先生は、8月に米寿を迎えられます。これ機に、ご研究および市民大学院運動をさらなる高みへ押し上げようとしてされています。米寿お祝いの会も企画されており、2021年8月21日（土）午後に、「池上惇先生米寿お祝いの会」がオンライン開催される予定です。

働学研（博論・本づくり）研究会は2019年7月、池上先生のご支援を受け市民大学院の成徳学舎にて第1回月例会を開催しました。2021年7月24日の第23回月例会で、ちょうど2周年を迎えています。この2年間、働学研に参加された方は60数名で、参加者総数は300数十名に上ります。ほとんどの方が、池上先生を直接、間接にご存知とみられます。

働学研の理念や進め方には、池上先生との半世紀を超える交流、薫陶も、深く反映していると感じています。月例会にもよくご参加いただき、含蓄の深いアドバイスもいただきます。

そこで、働学研2周年記念企画として「米寿お祝いメッセージ集」をまとめたく思い、7月17日に働学研の共有メールで、下記の寄稿依頼を会員にお送りしました。

池上先生との交流や様々な思いについて、一端やエピソードなどを下記の要領でまとめていただき、十名（tona@iris.eonet.ne.jp）へお送りください。

期限：2021年8月10日（早いほどベター）

ワード：1～2ページ（40字×36行/ページ）程度。

半ページ、数行でも構いません。電子メール文もOKです。

国際文化政策研究教育学会および基礎経済科学研究所の各位にも、共有メールで寄稿のお願いをしています。

7/24の第23回働学研（オンライン）では、特別企画「池上先生との交流や思い出を語り合う参加者座談会」を織り込みました。参加された方々（20歳代半ばから90歳近くに及ぶ20名）に、これまでの60年余にまたがる池上先生との交流、思い出などを熱く語っていただきました。それを機に、米寿お祝いメッセージも届いています。

池上先生との交流、思い出などのメッセージを、ぜひお寄せください。お待ちしております。どうかよろしくお願ひします。

（働学研主宰、お祝いメッセージ編集担当）

2021年7月17日（働学研、国際文化政策研究教育学会、基礎経済科学研究所へ）

「池上惇先生米寿お祝いメッセージ集」の企画と寄稿のお願い

— 働学研2周年記念 —

2021年8月21日（土）午後に、「池上惇先生米寿お祝いの会」がオンラインにて開催される予定です。

働学研（博論・本づくり）研究会は2019年7月、市民大学院の成徳学舎にて第1回月例会を開催しました。2021年7月24日の第23回月例会で、ちょうど2周年を迎えます。働学研の理念や進め方には、池上先生との半世紀を超える交流、薫陶も、深く反映していると感じています。月例会にもよくご参加いただき、含蓄の深いアドバイスもいただきます。

この2年間、働学研に参加された方は60数名で、参加者総数は300数十名に上ります。ほとんどの方が、池上先生を直接、間接にご存知とみられます。

米寿を機に、ご研究および市民大学院運動をさらなる高みへ押し上げようとしてきています。米寿お祝いの会も企画されています。

そこで、働学研でも2周年記念企画として「米寿お祝いメッセージ集」をまとめたく思います。池上先生との交流や様々な思いについて、一端やエピソードなどを下記の要領でまとめていただき、十名（tona@iris.eonet.ne.jp）へお送りください。

期限：2021年8月10日（早いほどベター）

ワード：1～2ページ（40字×36行/ページ）程度。

半ページ、数行でも構いません。電子メール文もOKです。

なお、7/24の第23回働学研では、特別企画「池上先生との交流や思い出を語り合う会」を急ぎよ織り込みました。そこで交流され語っていただいたことも、メッセージの触媒にしていただければと思います。

どうかよろしくお願ひします。

（働学研 十名 直喜）

2021年7月24日（働学研、国際文化政策研究教育学会、基礎経済科学研究所へ）

「池上先生との交流や思い出を語り合う」参加者座談会

— 7/24 第23回働学研（博論・本づくり）研究会 —

第23回働学研は、東京五輪開幕早々の7/24（14:00～17:00）に開催され、25名にご参加いただきました。

7/24 第23回 働学研プログラム

発表15分+議論15分=30分/本：計180分、司会:十名、画面:澤

第1分科会 「生命の生産と再生産」（エンゲルス）への現代的眼差し 14:00～15:00

横田幸子：「人類進化と家族」序章4 家族進化論をめぐる論点とその変遷」

片山勝己：「企業内学校論の体系化に向けて —博論化構想メモ」

第2分科会 環境行政&環境教育への働学研アプローチ 15:00～16:30

程 遠紅：「博論第6章 中国における環境教育の現状と課題」

濱 真理：「基礎自治体の廃棄物・環境行政」（大阪市役所33年体験をふまえて）

藤井敏夫：「資源循環と廃棄物問題」（愛知県環境行政30年をふまえて）

特別企画 16:30～17:00

参加者座談会：「池上先生との交流や思い出を語り合う会」

最後に特別企画として行われた参加者座談会では、ご参加された方々（下記20名）に、これまでの60年余にまたがる池上先生との交流、思い出などを語っていただきました。

（敬称略）太田、小野、片山、金井、聴濤、岸本、木林、熊坂、小林、澤、槌田、程、中谷、中野、濱、平松、藤井、松浦、守友、十名、

20歳代半ばから90歳近くにまたがり、青壮老の様々な視点から語っていただきました。京大、基礎研、社会人大学院、市民大学院、働学研など、1950年代（池上先生の大学院生時代：聴濤）、60年代早々（助手時代：中谷）から、最近に至るまで。

それを機に、米寿お祝いメッセージも数本いただき、小生の方でメッセージ集に編集中です。（2021.7.25 「ご報告：7/24 働学研」一部抜粋）

（十名 直喜）

<メッセージ>

— お祝い・感謝 & 仕事・人生 —

池上先生の米寿を記憶の時として

広瀬 滋

振り返れば、西端先生の市民大学での繁昌神社の研究報告会に誘いを受けて、はじめて池上先生に出会い、文化経済学という分野のあることを知り、色々会話をしているうちに、先生がウィリアム・モリスなどの活動にも精通されていて、建築、デザイン畑の私には、経済学とデザイン活動との関係を改めて意識、とても新鮮な感動を受けました。

そこで、私の所属しているジャパンデザインプロデューサーズユニオンの総会に池上先生をお招きして、お話をしていただき、分科会では、越智先生の研究発表会に参加いただき、以来、色々な行事に参加していただき、ともすれば感性が先立つ世界に、先生の思慮深い助言を頂くことが出来ました。

私自身「生活建築学と文化経済」というテーマで2年間にわたり、先生の対面指導を受け、ひとまず論文をまとめることが出来ました。

また、遠野でのふるさと学校の学舎の民家・改築に参画させていただき、京都生まれの京都市育ちの私に、東北という地方文化、生活の一端を体験させていただき、文化資本のあり様を見つめ直す機会を実感することが出来ました。

偶然にも、先生の彦根での80歳の誕生会、気仙、住田町での85歳の誕生会にも参加できましたが、その度、先生の人生を貫いて流れる熱い想いに触れ、自分も来年1月には80歳を迎えますが、先生との出会いで、人生の終末に、生きることを噛み締めることが出来たことを感謝しています。

先生のこれからも元気に活躍されることを祈念します。

(2021.7.18 市民大学院、働学研)

池上先生との思い出

小野 満

私と基礎経済科学研究所(基礎研)とのつながりは1974年の石油ショックに始まります。この新しい危機との出会いは、従来の『資本論』の学習ではとらえられないものでした。私はさらなる学習を求めて講演会や学習講座を亘り歩きましたが満足する結果は得られませんでした。そして基礎研を探し当てたのです。ちょうど基礎研が「資本論・帝国主義論講座」を開催し夜間通信研究科を設置したころでした。基礎研へ入って驚いたことは、労働者は「働きつつ学ぶ権利」があり、労働者は学習するだけでなく研究する必要があるとその能力もあるということでした。

後日、基礎研創立25周年の「経済科学通信」の記念号で私は故柳ヶ瀬孝三先生と共に池上先生にインタビューさせてもらったことがあります。先生はお忘れだろうと思いますが、京大の研究室にお邪魔させていただきました。その時私は先生に、労働者が研究する、研究者にもなれるという確信はどこから出たのかと質問しました。その答えは、自分の労働を見つめて研究する労働者や労働組合というのは日本の特色である、それを積極的にやってきてその実績もあるということでした。私は、そんなものかなあと感じていましたが、その後社会人大学院が現れ社会人で修士論文や博士論文を完成させさらには専門の研究者のなる人も現れるようになりました。先見の明に感服する他はありません。

先日遅ればせながら先生の『文化と固有価値の経済学』を読みました。これが出版されたころは、文化経済学というものはわれわれ中小企業労働者には関係のないものと考えていましたが、読んでみると、私が常々考えていた「機能価値と感性価値」の問題に深くかかわることがわかりました。更に学習を深めたいと思っています。先日「競争」の問題でいただいたコメントも非常に的確なものでした。今後とも直接的に間接的にご指導のほどよろしくお願いいたします。命ある限り学び究めていきたいと考えています。

(2021.7.25 基礎研、働学研最高齢)

3世代の連携力が生み出す研究という料理の妙味

片山 勝己

私、池上先生とはまだお会いしたことがありません。ご著書もあまり読んでいません。

でも、十名先生より池上先生とのご縁をいただきました。池上先生も寄稿されている、『地域創生の産業システム—もの・ひと・まちづくりの技と文化』(十名直喜編[2015]、水曜社)を読書しノートしました。

十名先生がご自身を父、池上先生を祖父、そして十名先生の学生を子となぞらえて表現されてきました。

3世代の研究者が、和洋中の各料理手法で、研究という料理を、世代連携力を用いて作られている。

祖父と父と子が作るメインディッシュ（本書主要章）を食前酒、アペタイザー、そしてデザートとして盛り立っている。

何て凄いゼミなんだ。美味しそう！…と思いました。

(2021.7.25 マツダ勤務 40年、働学研)

米寿お祝いの盛會を祈念

中野 正己

本日も働学研に参加させていただき有難うございました。

大学卒業以来長らくご無沙汰していますが貴兄が粘り強く、色々な困難を乗り越えて「働学、研」を実践して来られたことを今日改めて感じました。

僕も色々なことが有りましたが、貴兄の努力を思うと頭が下がります。

『人新世の資本論』を読んだことから貴兄の主宰されている働学研を覗かせていただくことになりました。今日は質問などするつもりはなかったのですが時間があるように思ったのでつい手を挙げてしまいました。場違いな質問であったようにも思います。ご容赦ください。

池上先生は尊敬申し上げますが、直接の面識がなく、8月21日のオンラインのお祝い会への参加はご遠慮させていただきます（偶々予定も入っています）。ご盛會を祈念しております。

(2021.7.25 京大・野村ゼミ 1971年卒、働学研)

『資本論』学習や学生運動へのご支援に感謝

聴濤 弘

米寿をお迎えになり、お喜び申し上げます。

私が1950年代末に学生であったころ、先生は院生でした。『資本論』学習のご指導や、当時の困難な学生運動へのご支援をうけたことを思い出します。私は政治の道に進みましたが、先生のお名前を聞くといつも懐かしく思っていたものです。これからもお元気で活躍されることを願っています。

(2021.7.25 元参議院議員、働学研)

IT技術者からのお祝いと20代の誓い

澤 稜介

池上先生、この度は米寿を迎えられるとのこと、心からお祝いを申し上げます。

木林さんに働学研を紹介いただき、2021年の1月より働学研に参加させていただくようになったばかりで、直接お会いし、お話しさせていただいたことはございませんが、一度働学研のオンライン月例会で同席させていただき、貴重なコメントをいただいたことを記憶しております。

木林さんからよく池上先生の偉大さやお人柄・思想を伺っております。

これから十名先生のご指導のもと、博論さらには、その先にある創造的な仕事を生み出すことを目指しており、池上先生にも認めていただけるよう精進して参ります。

どうぞこれからもお体を大切にいつまでもお元気で過ごしてください。

(2021.7.25 働学研)

研究の励みとなる大切な宝物

杉山 友城

この度、米寿を迎えられましたこと、心よりお喜び申し上げます。

先生からいただきました二葉のはがきは、大切な宝物であり研究に行き詰った際に読み返し、励みにさせていただいております。

1933年8月20日の新聞を取り寄せてみました。

歴史や文化の繋がり、地下茎のように複雑に絡み合い、織りなしてきた多くの人たちのネットワークが今にまで続いていることを感じております。

引き続き、ご指導いただけますと嬉しく存じます。

これからも健やかでいらっしゃいますようお祈りしております。

<付記>

大変ご無沙汰してしまっておりますこと、本当に申し訳ございません。

さて、遅くなってしまいましたが、池上先生へのお祝いメッセージと池上先生がお生まれになった日（1933年8月20日？）の「中外商業新報」（日本経済新聞）をお送りさせていただきます。

（※池上先生にのみご共有いただけますと嬉しいです）。

何卒、よろしく願いいたします。

働学研への参加がなかなかできず、本当に残念ですし申し訳なく感じております。

現在、本学の先生たちと新たな出版に向けた取り組みをしております。まとまりましたら、ご報告させていただきます。

何卒、よろしく願いいたします。

（2021.7.26 福井県立大学地域経済研究所、働学研）

知の泉・池上惇先生の米寿をお祝いして

濱 真理

思うところがあって、2009年、55歳で仕事を中途退職し、京都大学公共政策大学院に入学した私は、植田和弘先生（現京大名誉教授）に日常のご指導をたまわった。やがて、京大経済学研究科の研究者として、朝から夜までとってよいほど、お世話になり続けた。いま私は、植田先生を、研究と人生の師匠と勝手に仰いでいる。したがって、私は、池上惇先生の孫弟子である！（池上先生、愕然）

植田先生は、博士論文検討会という研究会を主宰しておられた。博士学位をも持たない研究者が学位取得を目指す研究会である。私は植田先生に強くお誘いいただき、この研究会のメンバーにさせていただいた。ところが、植田先生が病魔に倒れられた。そこで、池上先生がこの研究会を引き継がれたのである。

私は現在、名古屋学院大学に学位申請している。ここまで研究をまとめることができたのは、池上先生の丁寧なご指導のたまものである。

私にとって、池上先生は、まず笑顔を絶やさず、優しい指導者である。

ご指導を受けてまず驚愕したのは、その該博な知識である。とりわけ社会・人文科学の分野では、古典から最近の研究まで、専門の経済学にとどまらない様々な領域において、著作物の内容や論者の主張を把握しておられる。

そして、指導を受ける者の主張に寄り添って、建設的なアドバイスをされる。自らの主張を押し付けるとか、指導を受ける者のアイデアを否定してかかる姿勢は全く無い。もちろん、客観的な誤りはその場で指摘していただける。

さらに驚いたのは、その行動力である。ご高齢にもかかわらず、東北の住田町や遠野市に、毎週のように足を運ばれていた。

私は、大阪市立大学の経済学部で1976年に入学した。当時の経済学の一方の峯は、マルクス経済学であった。「経済原論」における、佐藤金三郎先生の、論理的で明快、かつ最先端の研究成果も盛り込んだ講義（医学部学生まで聴講する人気講義であった）に引き付けられたこともあり、マルクスに関心を抱いた。『資本論』3巻も倦むことなく読了した。

池上先生のお名前を知った時、島恭彦先生の後任の財政学の教授だから、経済理論としては、マル経主流派の、おそらく講座派系列の先生だと勝手に決めてかかった。ところが、親しくご指導をたまるとなると、全く違うことがわかった。

強引に述べるならば、唯物史観に重きを置かない立場である。上部構造の重要性を強く主張されるのだ。

先生のご主張を一言で表せば、「アマルティア・センの言う意味での「自由」を得た人間の、「人間開発」(development)の力を信頼する」。

これが、池上先生の研究方法論の基本であり、社会に在る人間としての先生の生き方

のベースとなっている信念でもある。先生のこれまでの研究をみていくと、この方法論は一貫している。

財政学に関し、公共の予算は、市民が「さまざまなレベルの意思決定過程に参加しつつ、個人の自己実現をはかりうる制度」でなくてはならない、と先生は論じた（池上惇（1990）『財政学－現代財政システムの総合的解明－』、岩波書店、p.97）。

文化資本の重要性の強調も、上記のポテンシャルを秘めた人間が集い合うことによって生まれる文化と、その個人への作用・相互作用の着目を意味する。

学習社会へのまなざしも、人間の力量への信頼からもたらされる。

そして、何よりも、市民大学院や東北などでの実践は、先生のこのような知の結晶が、生き方として体現されたものである。

池上先生の研究成果と行動は、すべて、人間に対する愛から発している。この源泉がある限り、これからも池上惇という泉からはこんこんと新たな知がわき出で続けるであろう。

(2021.7.27 博士論文合格、働学研)

池上先生へのお祝いメッセージ

太田 信義

池上先生、この度は米寿を迎えらえるとのこと、心からお祝い申し上げます。

私は十名先生を指導教官として2012年から名古屋学院大学博士後期課程で博士論文作成の指導を受け、「働学研」に参加する者として今日に至っております。そのため、池上先生の講義を聴くなどの直接の教えを受けた経験は残念ながら持ち合わせておりません。

最初にお目にかかったのは、2013年に名古屋学院大学栄サテライトで開かれた十名先生の著書『ひと・まち・ものづくりの経済学』の書評会と記憶しております。その折、私は評者の一人としてとして、ものづくりで活用している「型」（成形型、プレス型など）の役割と、著書の中で語られている「型」を対比させて十名理論の独自性を述べました。

この私の発表に対する池上先生のコメントが「企業出身者は、面白いことを言うね」だったと、後で聞かされました。これを聞いて、私は「池上先生は人の本気度を上手に引き出す教育者だな、さすがな方だな」との強い感銘を受けました。

今も、この言葉を大切にして十名先生の教えのもとで「働学研」に参加し、年齢にあった研究を続けながら多くの方々との交流を続けております。若い人達へのうまいバトン渡しができるばとの思いです。

どうぞこれからもお体を大切にされ、お元気でお過ごしください。

(2021.7.27 名古屋学院大学博士の会会長、働学研)

社会人大学院・人間発達の理論・農山村の未来に向けて

—長きにわたる学恩に感謝して—

守友 裕一

1 財政学研究会への参加

私は1983年に地域問題を担当する教員として福島大学経済学部採用されました。地域問題といってもその対象範囲は広く、地域経済、地域社会、地方自治など広く勉強をする必要がありました。私自身もともと農業・農村経済を軸として地域問題を考えていたのですが、特に地方財政に関する問題はこれからの地域の進路を考えていくにあたって基本という感じがして、「財政学研究会」に加入させていただきました。

それから1～2年たって仙台市で研究会が開催されました。研究会終了後ホテルのロビーで何人かの研究者と話をしていたら、一人の先生が「じゃ、ちょっと行きましょか」といって皆を誘い、近くの喫茶店へ行き、そこで話を続けることができました。お誘いいただいたのが池上先生でした。「品のいい先生だな」と思ったのが初対面の印象でした。

2 京大での内地研究へ

1989年に文部省派遣による内地研究員（国内の他大学で8カ月間研究に従事）となることが内定しました。どこでどんな勉強しようかと考えましたが、地方財政の勉強が重要との判断で、当時福島大学経済学部で地方財政論を担当していた清水修二さん（京大文学部、経済学部卒・池上ゼミ）のお取り計らいで、京大経済学部の池上惇先生のところへ行かせてもらうこととしました。

内地研究は7月からでしたが、事前にご挨拶やアパート探しのため京大の池上研究室を尋ねました。打ち合わせを終えて池上先生は、「ちょっとご案内しましょか」といって吉田山から真如堂や金戒光明寺の見えるあたりまで案内をしてくださいました。そのあたりは幕末期京都守護職を務めた会津藩主松平容保が本陣をおいたところでした。あとでわかったことですが池上先生のご先祖は会津藩士とのことでした。

3 社会人大学院との出会い

内地研究の間はまじめに色々な講義を聴講させていただきました。大学院は月曜日に一般の院生を中心としたゼミ、土曜日には社会人大学院生のゼミがありました。私は両方参加させていただきましたが、圧倒的に面白かったのは後者でした。

神戸製鋼にいて会社と研究の狭間で苦勞し、「怨念を力に」「二足のわらじでがんばる」といってゼミを引っ張っていった十名直喜さん（前名古屋学院大学）や京都府庁に勤めながら通ってきていた多田憲一郎さん（現鳥取大学）をはじめとして、多士済々で、議論はいつも熱を帯びていました。

ただ池上先生からは地方財政論を教えてくださいなと思っておりましたが、ゼミで先生

はジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスなどに関する芸術経済学、文化経済学、人間発達論の話をしてもらいました。

また不思議だったのは、レポーターが報告を始めると、先生は目をつぶり、「うとうと」という雰囲気。しかし報告が終わると目を開けて、しっかりと鋭いコメントをしておられました。「この先生の頭の中、どうなっているのだろうか。すごい！」と感心したものでした。

ゼミが終わると時々京大近くの日仏学館のなかの「ル・フジタ」で先生を囲んで食事をしました。そのあと飲み足りない私などは京都在住の院生の案内で河原町の方へ向かいましたが、先生は研究室へ帰って行かれました。「え！まだ勉強されるのだ」とびっくりしたことを覚えています。

このほかにも外部の方を含めた研究会もしばしば行われ、後に「内発的発展論」の研究で交流を深めることができるようになった方々が沢山参加しておられました。

4 内発的発展論から農山村の未来へ

福島へ戻ってから、それまでの全国各地の地域調査結果や京大の社会人大学院で学んだことを踏まえて、『内発的発展の道』（農山漁村文化協会 1991年）を取りまとめました。その中では鶴見和子、宮本憲一先生たちの理論を基礎に、地域の内発的発展とそこにおける人間の成長・発達とを一体のものとしてとらえるという考え方を入れさせていただきました。先生の人間の発達、潜在能力論などを参考にさせていただき、先生のおっしゃる「地域の再生」とは「失われつつある人間らしい暮らしを、地域に住む人間の立場に立ってとりもどそうとする動き」とのお考えはそのまま引用させていただきました。

その後池上先生は、「文化政策・まちづくり大学院大学」の設立準備から、さらに岩手県住田町・遠野市を拠点とする「ふるさと創生大学」の設立・運営に力を注がれておられます。

実は私は1977年冬以降数回住田町を訪れ、当時の佐熊博農協組合長（後住田町長）からお話をうかがったことがあります。佐熊氏の「わが町は生きるに値しない町なのか」という根源的な問いかけを受け、さらに山村の自然、歴史、集落構造を踏まえた「山間地高生産農業の創造」のお話をうかがい、それをもとに集落と山村の農林業の発展方向を考える調査をしたことがあります。

いま池上先生はその住田町・遠野市を拠点に、「学習社会の創造」活動を進めておられます。私はそれが地域での内部循環・自然との共生、人間の成長・発達そして維持可能な社会を作り出していく「鍵」となり、またそこにこれからの農山村の未来を指し示す方向性を感じております。

先生はこのたび米寿を迎えられましたが、お体にご無理のない範囲でますますのご活躍と、私たちへのご指導をお願いして、お祝いの言葉とさせていただきます。

(福島大学食農学類客員教授、宇都宮大学農学部名誉教授)

壮大な研究史のご出版をぜひ！

的場 信樹

先生の米寿を心からお祝い申し上げます。

この保守的な日本の学界にあって、たえずその先端で走り続けてこられた先生のお仕事
が、本当の意味で正当に評価されるのはこれからだと思います。そのためにも、発達の経
済学、進化経済学、文化経済学を日本で創始された先生の研究史をまとめられ、次の展望
をわたしたちに指し示していただきたい。そのためにも先生には、どうか末永くご活躍く
ださい。

(2021.7.29 元佛教大学教授)

池上惇先生との出会い

熊坂 敏彦

この度、池上先生は米寿をお迎えになられるとの報に接し、心よりお祝い申し上げます。
ますますのご健勝と、池上経済学体系のさらなる発展を祈念申し上げます。

この機会に、私と池上先生の出会いについて、簡単に筆をとらせていただきます。

私が池上先生のお名前を存じ

上げたのは、1970年代前半、大学1-2年の頃のことです。東北大学経済学部の工業経済研
究会（通称「工研」）という中小企業の研究会に所属していました。その会の指導教官であ
った金田重喜先生（京都大学出身、工業経済論）や同会の先輩方が、池上先生の「国家独
占資本主義論」について論じており、池上先生を身近な存在として認識していました。

その後、社会人になって、池上先生の一連の「文化経済学」や「文化資本論」に興味・
関心を持ち、ご著書を勉強させていただきました。

そして、産業学会で十名先生に出会い、ご指導をいただくようになりました。それをき
っかけに、2016年3月、ついに、名古屋学院大学さかえサテライトで開催された春季研究
交流集会で、池上先生に直にお目にかかることができました。しかも同じセッションのパ
ネラーとして同席させていただくという光栄に浴したのです。大先生の理路整然としたご
報告や論評に圧倒されながら、まるで夢のような時間を過ごさせていただいたことを思い
出します。終了後に、大内秀明先生（東北大学名誉教授）のウィリアム・モリス論等の話
等をさせていただき、私が持参した池上先生のご著書『生活の芸術化—ラスキン、モリス
と現代』にサインさせていただきました。そこには、「市民を芸術人とし まちとむらを文化
の拠点に」が記されていました。

(2021.7.30 働学研)

文化経済学会での出会い & You Tube 番組づくり

古畑 浩

池上先生には長年、文化経済学会〈日本〉でお世話になってきました。初めてお会いしたのは1999年の渋谷の国際会議でした。拙い足助屋敷の報告、英語であったのを覚えています。

翌年はミネアポリスで大鋸先生のサポートを得て、朝ごはんにはスロスビー、タウセ両先生にご挨拶できました。下っ端の小生にはかけがえのない交流の場でした。

そして、ラスキンスクールでは京都駅のビルでお世話になりました。2010年代、52回に及ぶ拙講義にて成徳中学学舎の市民大学院でお世話になりました。

今は遠のいてしまいましたが、麻島先生、金井先生、岸本先生、皆様に見守られて、今日に至っております。今回は中谷先生、阪本先生、荒木先生皆様の主催で、盛大に池上先生のお祝いが出来、嬉しく思っております。

池上先生の本は丸善の新書が最初に読んだ記憶があります。学部ではアメニティについてもやっていたことがあり、文化経済学の入門はまちづくりの話が最初と思っております。イギリス社会経済史の長島伸一先生の講義でラスキン、モリスを学んでいました。リサーチの意味を博士学位や定職のない今、You Tube 番組づくりで実感しています。

名古屋大学大学院では、東栄町調査の始まりとなりました。当時、私の所属した研究室は失敗でした。なので、池上先生に救っていただいたのは誠に奇跡的です。

ふつうなら、とっくに腐ってダメ人間まっしぐらだったと思います。縁あって慶應義塾の美山良夫先生には卒論指導でお世話になりました。亡き増田先生には御岳噴火で励ましていただきました。お掃除されてたおばさまの音声も番組にあげました。

どこで誰に救われるか、不確実性の世の中ですが、池上先生の生き方に敬意を表しながら、先生のご健康とご多幸をお祈り致しております。池上先生の人脈の広さと層の厚さにはいつも驚かされております。私も阪本先生と同じ年の木曾町古畑浩です。ありがとうございました。

(2021.8.2 市民大学院)

森嶋通夫への導き

中西 康信

2012年3月、いずれ明らかにすべきと考えている大学での事件があり、実質上そのことにより、九州の大学で勤めていた私が退職することになり、失意の中、大阪に帰ってきた。その際、一番励ましていただいたのが、池上先生であった。幾度か、京都まで伺い、食事などをご馳走していただいた。

その事件と言ってもいい出来事は2008年の4月に端を発するのであるが、私が困ったことになったと思ったその年の夏休みに、京都まで伺い、池上先生には事情を話していた。それ以後、大阪に帰省すると、京都まで伺い、池上先生にお逢いすることが多くなった。事情を全てご存じの上で、2012年3月の末、どうしようもなくなって、大阪に帰ってきた私に、「戦争に行って、帰ってきたみたいやな」と言われたことを記憶している。それと同時に、当時、森嶋文庫を既に市民大学院で引き受けていたこともあってか、阪大社研騒動とも言われた事件で、阪大を去り、渡英し、終生イギリスで過ごした森嶋通夫のことを想起されたのか、「なんか、森嶋さんみたいやなあ」とも言われたことも、鮮明に記憶している。

池上先生が、時代や場面はもちろん異なるのだが、森嶋と私を重ね合わせられたことは、その後の私の森嶋通夫研究に背景で大きく影響したように、今は考えている。

その後、森嶋の訾咳にロンドンで接した安富歩・東大教授と出会う契機も、池上先生が当時懇意にされていた方を通じてであった。池上先生がどこまで意図されたかは分からないが、大学退職後の私は、森嶋通夫に吸い寄せられるような感覚だった。私が森嶋の自伝を読み返し、森嶋が阪大社研騒動を日本社会論として論じていることが理解できたのも、私自身の大学での退職にまで至る事件と重なったからである。そのことが私に、森嶋研究を決意させたと言っていいように考えている。

今は両親の介護という重たい課題に振り回されているが、いずれ、私の森嶋研究を公にすることが、池上先生に対する返礼となることは言うまでもないことが、その時まで、ご健勝であられることを切に願っている。

(2021.8.2 市民大学院講師)

経済・財政、公務労働、そして文化・地域の視座に導かれて

岡田 重信

池上先生、米寿おめでとうございます。

「還暦を祝う会」(1993)、「退官記念講義&パーティ」(1997)、「古希を祝う会」(2003)、「叙勲祝賀会」(2012)、そしてこの度のコロナ禍での「米寿祝賀会」。こうした節目にあたり、ともにお祝いする機会をご用意いただいた方々に感謝します。

私は京都大学経済学部でご指導いただいた第9期ゼミナール生(1973.4~1975.3)、池上ゼミ30年の歴史の中で、ちょうど三分の一あたりの世代です。テーマは「現代日本経済論」と「現代日本財政論」。同期メンバーは、当時の世相を反映してか、産(民間企業)・官(公務員)・学(大学院)、それぞれバランスよく卒業後の進路を選択していました。

大阪府庁に就職した私は、池上先生が「働きつつ学ぶ場」として立ち上げに尽力された基礎経済科学研究所の勉強会に、自治体公務労働とは?の問題意識を持って参加させていただきました。でも力及ばず早々に挫折!今あらためて『資本論』が注目されていますが、当時京都での勉強会に加え、大阪市内で資本論を読み解く講義が開催されていました。その講義で、人間発達の諸条件を探求する『資本論』の読み方として、「商品論」(第一巻第一篇第一章)からではなく「労働日」(第八章)から読み進める試みがされていたことを思い出します。

大阪府庁退職後、団体での職務を経て、現在は、地元富田林市のシルバー人材センターのお世話で、市内の小・中学校給食に関わる業務に携わっています。また地域の合唱団に参画し、その活動を通してささやかながら「生活の芸術化」を実践しています。

これまでのご縁で参加している文化経済学会や国際文化政策研究教育学会については、ほぼ会費を納めるだけの会員。それでも事務局から送っていただく論文集や資料等に目を通すことで、心地よい刺激を得ています。気力・関心・問題意識の続く限り継続しようと思っていますので、よろしくお願いします。

この機会に一つ提案です。これから、会員の方々の著作出版が企画されているとのこと。ついでにはその普及も同時に必要です。すでに学会として公共図書館への働きかけなどの取り組みがすすめられているようですが、昨今の自治体の厳しい財政状況から公共図書館の資料購入費は、どこも大幅に削減され、資料購入がままなりません。その一方で、利用者である市民から予約を受ければ、公共図書館は、自館で購入するか、あるいは他館から相互貸借するか、いずれかの方法で資料提供するサービスが求められます。つまり会員自らが購入するだけでなく、同時に最寄りの公共図書館にも予約することにより、図書館蔵書の可能性が広がるのではないのでしょうか。この手法を活用し、私の地元富田林市立図書館で、池上先生はじめ十名直喜先生や富澤公子先生のご著書の蔵書を実現させることができました。皆さんもいかがでしょう。

コロナ終息と池上先生のご健勝を祈念し、お祝いのメッセージとさせていただきます。

(2021.8.4 池上ゼミ)

珠玉の助言に導かれての「働学研」半世紀

十名 直喜

池上先生との交流は、半世紀以上にわたります。その間にいただいた薫陶が、わが仕事・研究（働学研）人生におけるいくつかの**画期とドラマ**を創り出してきました。

第1の画期は、学部時代（1969-70年）におけるゼミでの2年間にわたる交流とご指導です。大学紛争で休講が日常茶飯事のなか、ゼミ（3-4年合同）は週2回励行され、貴重な学びの場となりました。当時注目された学術書（宮本憲一『社会資本論』、中村静治『戦後日本経済と技術発展』など）をテキストにして、ゼミ生相互に活発な議論がなされました。

ゼミの節々でいただいた池上先生のご教示は、実に含蓄に富むものでした。学部自治会の要請により、宮本先生や中村先生などを集中講義に招聘した際に、ゼミでのアドバイスをふまえて質問すると、深い議論となりました。池上先生の示唆がいかにも的確かつ深いかを、体感する機会となったのです。池上ゼミでの貴重な体験は、学部や学生寮での自治会活動とも相まって、わが青春とその後の生きざまに深いインパクトを及ぼしました。

第2の画期となったのが、25歳の時に研究論文のご指導をいただいたことです。高炉メーカーに入社して3年目の1973年、初めての研究論文「大工業理論への一考察（上）」をまとめました。池上先生にみていただき、2-3カ所（2-3行ずつ）朱筆をいれていただくと、2万字近い論文全体がシャンと立ち上がったのです。一流の筆の凄さを体感した次第です。

初の論文は、高い評価を受け、注目されました。その手応えと反響が、「働きつつ学び研究する」（働学研）という道を歩むスプリングボードになったのです。論文ともども公刊された随筆「働きつつ学び研究することの意義と展望」は、「25歳の抱負」となりました。

第3の画期は、1987年春にやってきました。京大経済学研究科に社会人大学院を新設するからぜひ受験を、という手紙が池上先生から届いたのです。高炉メーカーで働きながら研究を続け、公刊論文は10本以上、300ページを超えるも、会社処遇と研究の2つの厚い壁にぶつかり、先行きの見えない状況にありました。お手紙で、逡巡する背中を押していただき、社会人大学院に入学したのです。

社会人大学院での5年間（修士&博士課程）は、それまでの仕事と研究を問い直し、深めつつ新天地を切り拓く再生の機会となりました。特別ゼミとして作っていただいた産業論研究会（隔週・土曜）が、実質的に唯一の研鑽の場となりました。それまでの大学院ゼミとは違って、参加者が発表資料を毎回持ち寄り議論するというやり方を編み出しました。ゼミには、社会人研究者が次々と参加され、面白いという評判で遠方の大学教員まで特別参加される活況も呈しました。

ゼミでの研究をバネに、1992年春に鉄鋼メーカーを退職し、大学教員に転進しました。翌春、出版した最初の単著書（『日本型フレキシビリティの構造』）で、94年春に博士（経済学）を授与されました。それまでの論文博士から課程博士へと切り替わる契機になった

とのこと。産業論ゼミからは、池上先生ご退職までの10年前後の内に10人近い博士を輩出し、各分野で活躍されています。

京大の社会人大学院での手応えは、その後、大学教員として社会人研究者を育てる上でも重要な手がかりとなりました。小生のみならず、池上先生にとっても、社会人博士を育てる上で大きなインパクトになったとみられます。

第4の画期は、名古屋学院大学大学院に博士課程が開設された(1999年)ことです。それを機に、博論ゼミを担当することになり、退職までの20年間、社会人博士の育成を図ってきました。その際、参考にしたのが京大社会人大学院の産業論研究会モデルであり、自ら切り拓いた働学研モデルでした。

社会人大学院の展開、社会人博士の育成という大事業において、池上先生との連携・協働という道が切り拓かれたとみることができます。

①鉄鋼メーカーでの21年間にわたる働学研の実践とノウハウ、②基礎経済科学研究所での交流と薫陶、③京大大学院の産業論ゼミでの5年間の試みと手応え。これらをベースにして、独自の社会人育成の手法を次々と編み出し実践してきました。

博士課程十名ゼミは、産業システム研究会として学内外の社会人・研究者にも門戸を開き、社会人博士14人(課程博士11人+論文博士3人)を送り出すことができました。

その経緯をまとめたのが、『名古屋学院大学論集(社会科学篇)』(十名直喜教授退職記念号) Vol.56 No.3です。ゼミ出身の社会人博士10人をはじめ多くの方が、働学研の体験と思いを綴られています。小論(十名[2020.1]「働・学・研」協同の理念と半世紀の挑戦)も、その1つとして寄稿したものです。それらのエキスは、十名[2021.2]『人生のロマンと挑戦』の第2部に織り込んでいます。

第5の画期は、定年退職直後の2019年7月、池上先生のご支援を受けて、働学研(博論・本づくり)研究会、略称「働学研」を立ち上げたことです。博士論文づくり、博士号の取得、単著書出版などを、社会人研究者が実現できるように支援する研究会です。

研究の初心者から熟達者に至る社会人研究者の多様なニーズに応え、楽しく真摯に議論できる研究交流の場をめざし、国際文化政策研究教育学会、基礎経済科学研究所他にも広げてきました。主宰者の想定を超えて、多彩な研究交流や出会い、自己実現が生まれています。会員は、数名から出発し60数名に至っています。2021年9月には、働学研から社会人博士が誕生する予定です。

ふり返れば、池上先生との半世紀余の交流は、波乱万丈のなか実に濃密なものでした。画期とドラマは、上記の5つにとどまりません。**珠玉の時空間**であったと感じています。知と情の巨人の魅力(磁力)は、実に強い。深く学びつつも、自らの独自性をいかに切り拓いていくかに腐心した半世紀であったと言えます。

この関係が、さらに10年続くことを祈っています。くれぐれもお大事に。

(2021.8.4 働学研主宰)

米寿をお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます

横田 幸子

池上先生に、初めて直接にお目にかかったのは、もう半世紀以上前のことになります。

当時理学部に在籍していながら既に理学への執着を失っていた私は、「何故女性はこんなに差別されるのだろう」との疑問が頭から離れず、漠然とその解決の道を手探りしながら、病魔に襲われて悶々としていた時期でした。「経済を学べば、そこに解決法が見つかるかもしれない」との淡い憧れを持ちながら、具体的には何もできないままに。

そんな私に、「池上ゼミに入ったら！」と薦めてくれたのは、当時池上ゼミ所属の友人の梅垣さんでした。彼は逡巡する私を池上先生のお部屋に連れて行ってくれました。

そこで先生は、まるで当たり前のように「どうぞ！」と言って下さいました。

思いもかけずにゼミに入れて頂いて、訳のわからない内容に戸惑いながらも、新たな世界が開ける思いでした。夏には信州の竜王高原で行われた合宿にも、参加女性は私一人でご迷惑をおかけしながらも、参加させて頂きました。

でも、悲しいかな病魔は私を離れてはくれませんでした。

挫折・入院・闘病状態で大学を中退し、失意の基に夫の赴任先愛媛に渡った私に、子育てしつつ学ぶ場を与えて下さったのは、今は亡き柳ヶ瀬さんです。池上先生を師とする彼は、愛媛大学に赴任されると、基礎研の愛媛支部(?)を立ち上げられ、出産・子育て真っ最中の私を、資本論や池上先生の独占資本主義論などの研究会に誘って下さいました。

やがてご好意に甘えて、私の家で資本論の研究会を開催させて頂きました。ぐずる双子の娘たちには机の下で私の足を一本ずつ預けてあやしつつ、机の上で本を広げるといった状況下で、どこまで内容がつかめたかは疑問ですが。(蛇足ながら、この研究会に参加されていた芳野さんが、後日、大学の先生になられ市民大学院の講師もされました。)

やがて、私は学童保育の指導員として公的な子育てにも関わりつつ、まったく別の人生を歩み始めたのですが。公・私の子育てが一段落しかけた頃に私にアマチュア研究者の道を示唆してくれたのが、やはり社会人大学院生の育成に関っていた今は亡き夫でした。

夫の死・自らの長期入院闘病を間に挟んで、十年ほどかけて、遅ればせながら私なりの「卒論」を仕上げました。そして自費出版を目指して、既に京都に戻られていた柳ヶ瀬先生にご指導を仰いだところ、「池上先生に相談してみたら」と紹介して下さいましたのが京都市民大学院でした。ちょうど秋の文化セミナーの会場で、そこで議論を闘わせられている年配の方々の姿は、とても新鮮で、感動を覚えました。

大卒の資格を持たない私は、厚かましくも「これを、卒論として認めて頂いた上で、修論まで高めたいので、入学させて頂きたい」と家に帰ってからメールでお願いしました。

そして、ここでも、先生からは、いとも自然に「どうぞ！」との返信を頂きました。

関東在住だった私は、月に一・二度京都に通うことがやっとだったのですが。

梅垣先生には旧約聖書を、今は亡き益田先生には古事記を、まともに読む必要性を学ばせて頂きました。今は亡き小野先生には専業主婦のピークは1975年頃との示唆を頂きました。中谷先生には「家族・私有財産・国家の期限」に真正面からぶつかる勇気を頂きました。

私の様な場違いな者にも研究・発表の場を与えて頂ける市民大学院で、学び研究する仲間に出会い、様々なご意見・ご批判を頂き、共に学べる喜びを分かち合えました。

私のテーマは、少女時代からの疑問を、一つ一つ解いていくと言う形でしか進められなかったのですが。それでも10年かかって、とにかく数本の論文？にまとめ挙げることができました。池上先生は何も言わずにそれを受け止めて下さり、折に触れて貴重なコメントや励ましの言葉を頂いた事には、感謝の気持ちで一杯です。

池上先生が、住田にふるさと創生大学を開かれたことを期に、少しでも私にできる形でお手伝いさせて頂きたいと思い、遠野・住田・大船渡の女性たちとの貴重な係わり合いの機会を得ました。また、縄文文化の痕跡が息づいている自然環境下で、私自身のテーマを深めるきっかけを頂くこともできました。先生の念願の「大学院大学」の実現はまだまだ困難なようですが、現地では「創生大学」を中心に、まさに「ふるさと創生」を目指して新たな動きが広がりつつあることは素晴らしいことだと思います。

そして今、持病を抱えて、コロナ過で外出もままならない私には、十名先生の主催される「働・学・研」で、オンラインを通じての新たな出会いはとても貴重なものです。

私の書き溜めた数本の論文？は、十名先生をあきれさせるほど体裁が整っていないのですが。それでも先生は受け止めて下さり、厳しい叱咤と暖かな励ましを頂いています。

まずは序章と終章を書くという課題を頂いて、一年半ほどかけてそれに四苦八苦する過程で、私はいったい何を言いたいのかが、少しだけ論理立てて見えてきた様な気がします。そして今、書き溜めてきたぐちゃぐちゃな文章を簡潔な文章に書き直し、体裁を整えることで論文として完成させる、と言う課題を頂いて、その取り組みを始めた所です。

池上先生と、先生を取り巻く沢山の方々のご指導を頂いて、今の私があることの喜びをしみじみと感じています。そして、その恩に報いるには、何よりも私のテーマを纏め上げて、一日も早く形にすることだと、改めて気持ちを引き締めております。

最後にもう一度

池上先生 米寿をお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます

(2021.8.4 京都市民大学院研究員、働学研)

池上先生との出会いはセデンディピティ

—奄美研究での博士号授与と奄美での文化資本セミナー開催に感謝—

冨澤 公子

池上惇先生、米寿おめでとうございます。

これまで先生から賜りました研究指導への感謝の気持ちを、お祝いメッセージとしてお伝えできることをうれしく思います。

私が池上先生にお目にかかりましたのは2012年で、ちょうど10年前になります。池上先生との出会い、そして中谷先生、十名先生、市民大学の先生方との交流は、私の研究人生にとって、偶然な幸運で、セデンディピティがなせる技といえます。先生方のお力を得て、私の奄美研究は博士号授与という大輪の花を咲かせていただくことが出来ました。

多分、池上先生との出会いがなければ、悶々とした研究生生活を送っていたと思います。また、社会老年学から出発した奄美研究は、文化経済学や人間発達の経済学、地域経営や民俗学などの学際的視点へとすそ野を広げることもできなかつたと思います。

初めて、池上先生が主宰する市民大学に伺いました頃は、神戸大学大学院を単位取得退学し、京都に戻って立命館大学で非常勤講師をしながら、研究を続けていました。当時、福祉文化学会に所属しており、学会副会長の河島修先生が市民大学院で講義されるということで、初めて市民大学院の存在を知りました。その席上の自己紹介で、奄美の研究をお話ししましたら、池上先生が関心をもってください、直後に、今は亡き小野先生から市民大学院の研究会で発表しないというお誘いの電話を頂きました。その電話を与論島で調査をしているときに受けたことを、今も鮮明に覚えています。

それから、学会に入らせていただき、講義や研究会に参加し、これまで未知の分野であった文化経済学や文化資本、厚生経済学、二宮尊徳や行基の思想、柳田國男の歴史観などの学びを深める中で、私の長寿研究も深化していきました。一方で、新老年学の研究会や老年的超越の翻訳研究会の開催も後押ししていただき、池上先生は、お忙しい中毎回のように出席され、その時の先生の感想から多くの気づきも頂きました。市民大学院で研究を実践に結びつける場を頂いたことで、視野を広げ博論にも深みが増したと思っています。

博論を仕上げる過程では、池上先生が植田先生の後を引き継ぎ主宰された京大での博論検討会やメールでのやり取り、また対面の指導で池上先生の含蓄あるご助言を頂き、奄美研究を高みに誘ってくださいました。池上先生との応答が楽しみの時間でもありました。池上先生は常に暖かい眼差しで、褒めていただき、そして、期待して下さることがピグマリオン効果となって、博論に向かう情熱も高まったのでした。

池上先生との貴重な思い出は、2017年に3日間の奄美文化資本研究セミナーを開催できたことです。市民大学院からは、池上先生、金井先生、越智先生、小宮先生が参加されました。日頃から飛行機は苦手とおっしゃっていたので、実現は叶わないと思っていましたが、先生はその計画に快く応じていただき、そして参加を楽しみにしてくださいました。

奄美行きに際して、事前に奄美の地元新聞社2社へ論文を寄稿され、それは6段で大きく紹介され、市民大学院の活動やセミナーのPRになりました。

奄美での1日目は、大島紬村や黒糖焼酎工場の見学、国の無形伝統文化財に指定されている祭りの龍郷町秋名の皆さんとの懇談会、そして夕食は奄美の郷土料理と島唄ライブの店にご案内しました。大島紬村を訪問した際には、工場内に掲げられた目的理念(1. 大島紬を通して人格を高めます・礼節、寛容、感謝。2. 大島紬に最大の能力を発揮し魂を打ち込みます。3. 規則正しい生活の中で責任ある行動をします。4. 世界に通用するファッション産業として研究開発に取り組みます。5. 大島紬の貴重な技術を後世に伝承します)の看板を見つけられ、とても感動されていました。

また、夕食時、奄美では食事を頂きながら、サンシンに合わせてタイコを叩いたり、踊ったり、賑やかに楽しむ習慣があるのですが、池上先生も、皆さんと同じように、立ち上がって、手を交互に振りながら楽しそうに踊っておられました。とても印象に残っています。

2日目は、奄美の世界自然遺産に登録された金作原原生林を散策したり、大和村の公民館では、地元の方のお弁当を頂きながら伝統行事や結いの実際についてお話を伺いました。公民館の壁には大勢の寄付者名簿が掲げられており、集落の公民館が個人の寄付で建てられていることを知り、驚いておられました。

夕方には、奄美の中心地の名瀬で、池上先生の講演と地元の方々との交流会を開催しました。新聞で告知して頂いて、大勢の方が参加されました。翌日には、地元新聞社2社とも、池上先生の講演を大きく取りあげていただきました。

3日目は、黒糖工場に立ち寄り、工程を見学したり、出来立ての熱い黒砂糖をいただいたり、そして、奄美の伝統文化を紹介する奄美パークと田中一村美術館を見学して、帰路につきました。

3日間、盛りだくさんの内容でしたが、池上先生は疲れた様子もなく、楽しんでくださいました。私にとって、奄美に池上先生をご案内できたこと、奄美を体感して頂けたことが、夢のような出来事で、大きな喜びになっています。また、いつか、奄美にご一緒できればと願っています。

奄美では、長寿は幸せなこととして受けとめられています。祝い唄に、「61歳は若年のお祝い。73歳は中年のお祝い。88歳を願って100歳を祝おう」という歌詞があります。また与論では、昔から、子や孫が120歳まで長生きできますようにと、祈る言葉があります。

近年の長寿科学では、人間の寿命は120歳とされています。池上先生には、ぜひ、120歳は超えて頂きたいと思っています。まだまだ、池上先生のご指導を賜りたいと切に願っています。これまでの恩情に感謝しますとともに、これからもどうぞよろしく願い申し上げます。

(2021.8.4 働学研)

池上先生 米寿 おめでとうございます

樋田 洋

私が先生の直接のご指導を頂いたのは、もう 30 年近く前になりました。

当時は社会人大学院生として、何とか時間をやり繰りして修士論文を完成させようと必死だったわけですが、先生が社会人の修論指導のために毎月 1 回の研究会を開いて下さったお陰で、何とか完成することが出来ました。

この研究会では、皆のそれぞれのテーマでの研究報告に、報告中には静かに眠っておられたように見えたのですが、報告が終わると直ちに広い視野からの確な助言をされていたことを思い出します。修論の後には博士論文まで相談に乗って頂き、また教職に就く上でもお世話いただきました。

先生の学問研究への姿勢には、一貫して働く者の学習への支援が貫かれていると思います。研究者として自分なりのテーマを追求する中で、こうした姿勢を続けることは容易なことではないと、今になって感じています。

国際文化政策研究教育学会は、そうした先生の学問研究に対する姿勢の表れと感じています。引き続きのご活躍を祈念いたします。

(2021.8.4 京大大学院卒、働学研)

池上先生の文化遺伝子&構想を未来に活かす

木林 威夫

ご健康でお誕生日迎えられること、心よりお慶び申し上げます。

池上先生、そして、池上先生の遺伝子を継がれた方々に接し学ばせて頂くことの素晴らしさを、今あらためて感じます。

世界的にプラネタリーバウンダリー（地球ではなく、人類の生存可能な環境）という意味合いで、臨界点を迎えています。

コンピューターの計算処理が、人類を超え、自己の存在価値がなくなるかもしれません。富の集中と、データの集中で、国を超え少数のクリエイティブクラスが他をコントロールし、分断した世界になる状況もみられます。

そして日本では、世界で最も大きな災害リスクを抱えています。そう言いながらも、世界で最長の国家、会社の経営歴を有するサステナブルな国でもあります。

人類は間もなく、質量投下の必要がなくなる科学技術を手に入れようとしています。人類が、そして生命が、未だ経験したことのない「食べるために労働をしなくて良くなる」

という。90年前に経済学者が予言した未来が、あと10年ほどで来ようとしています。

そして2030年以降（実施は2040年程度かもしれないが）に、誰もが自己の可能性追求をできる世界、さらにその後、人間発達を追求し、コモンズを活かし、文化資本経営がなされていく世界が期待できます。

そんな未来が見え隠れする今、コロナが来て、ご体調を崩されながらも、不死鳥のように再び輝かれ、既にその思想は世代を超え多くの人々に影響を与えられています。

この、特にミレニアル世代以降に立ち込め、私自身にもあった「先の見えない不安」を吹き消し、未来への希望を示してくださったのが池上先生でした。

目の前の業務に心を奪われていた数年前、マクロとミクロの両方の視点でものを見る事に気づかせていただきました。私の使命は、池上先生の文化資本論という思想を、池上先生の「場作り」、十名先生の「働・学・研」を、文化資本創研という産学連携組織を通し、社会に伝え実装していくことであると感じております。

先生の思いや叡智を、再現性が高く、限界費用が少ない、更には時間や距離の制約という、人々がモビリティによって解決しようとしてきた身体的な制約も超え、デジタルというアプローチで私の役割を果たしたいと思います。

量子と粒子の解明が進むことにより、シンギュラリティも既に過去概念と化し、質量との関係性や制約が突破されようとする今、岡潔先生が話される情緒と、池上先生がおっしゃられる人間の本質やクオリアが重なって感じ、人の可能性、自然の雄大さに大いなる希望を感じております。

この、生命史における特異点を一刻も早く実現するために、有史以来先祖や先輩方が蓄積してくださったデータベースを学び直し、大きなパラダイムシフトを、多様な価値観のもとに乗り越えていかなければと思います。

私自身が社会により大きく貢献できるよう、果てしなく遠くはありますが、これからも池上先生の背中を追い、学びつつ実践し伝えていきます。

健やかな一年でありますようお祈り申し上げます。

(2021.8.5 働学研)

博士論文でのご指導を今後の糧に

古池 嘉和

池上先生、米寿おめでとうございます。

早いもので、先生のご指導を仰ぐようになって、すでに20年近くになります。大学院で
ご指導頂いていた当時の先生の年齢に徐々に近づいてまいりましたが、還暦を過ぎた今で
も、先生の足下にも及ばない現状に、情けない思いをしております。

今思えば、社会人大学生の私にとって、博士論文を書き上げることは、大変、困難な作
業でしたが、先生の叱咤激励のお陰でなんとか仕上げることができました。振り返ってみ
ると、走馬灯のように様々な記憶が蘇ってきます。福井の喫茶店では、さささっと赤字を
入れて頂き、あっという間に見違えるように文章が輝いていくのですが、後で読み返すと、
達筆すぎて随分苦勞したこと、また、極度のスランプに陥り、提出を先送りにしようとし
た際には、「先延ばしにしてもだめだ。集中して仕上げなさい」と背中を押していただいた
ことなど。

こうした大学院での経験は、大変懐かしく思い出されるだけでなく、今でも大いに役立
っております。実は、今年度から私の博士課程のゼミに中国からの留学生が在籍していま
す。彼女は、北京近郊の唐山市という町の出身で、そこに古くから集積している陶磁器産
業の特徴を、日本の産地と比較して明らかにしたいというのです。それは、私の博士論文
と類似するテーマであり、こうなると理論は、マーシャルです。この春学期に、都合よく
産業集積の部分から斜め読みしようとする学生に、「経済学原理は、体系化されているから、
最初からしっかりと読まないだめだ」と偉そうに話をしている自分に笑ってしまいました。
それは、まさに院生時代に池上先生から頂いたお言葉そのままだったからです。これ
も、偶然ですが、春学期のテキストとして、院生には『財政思想史』を読ませておりまし
て、池上先生の独特の文体を楽しみながら、私なりに勝手に解釈をして、偉そうに??学
生に伝えております。

さらに、この夏には、私のフィールドである美濃の産地に学生を連れて調査する予定で
す。「現場をしっかりと回りなさい」これも、また、先生からの受け売りです。しかし、これ
だけは、今でも先生のご助言を忠実に守っており、この歳でも現場主義だけは変わりませ
ん。もちろん、コロナが一段落すれば、すぐにでも唐山市に調査に行きたいと思えます。
この機会に、自らも改めて中国の陶磁器産地の実態を調べてみたいと思っています。

さて、今、大学では、短期的にはコロナ禍が、また中長期的には少子高齢化の二重苦に
晒されており、残念ながら、落ち着いて研究する環境ではありません。自ら制御しがたい
こうした外部環境を言い訳についついサボってしまいますが、そんなことでどうする！と
先生からお叱りの声が聞こえてきそうです(^ ^)。今一度、気を引き締めて頑張りたい
と思っておりますので、引き続きご指導のほど、よろしく願いいたします。

末尾になりましたが、先生のご健勝を心よりお祈りいたします。

どうかいつまでもお元気で！

(2021.8.6 名古屋学院大学)

池上惇先生の米寿に寄せて

小倉 信次

池上先生、米寿おめでとうございます。

池上先生の思い出として、経済的事象の学術的な記述ではアンファンク（ドイツ語、端緒）が大事とのアドバイスをいただいたことを記してみたいと思います。今もなお、博士課程での論文作成などにおいてその教えを念頭においてしゃべる場合があります。アドバイスをいただいたのは25歳ころのことで、その頃は左京区浄土寺真如町に住み基礎研に参加していました。残念なことには、一橋大学大学院を経て千葉商大に職を得て研究拠点が東に移ってしまい、先生の警咳に接する機会が相当少なくなりましたが、ご著書や市民大学院関係の呼びかけや論考など活字を介してご指導を受け続けることができたと感じています。

そのアンファンクですが、扱う対象への基本認識を冒頭で示す形で論述をスタートすべしということで、当該分野での研究上の成果（定説）を踏まえた書き方が必要なのだと知りました。事例はわが国の工場法（1911年）でしたが、「上からの資本主義」という当時の日本資本主義の特質を踏まえて説くべしということでした。「上からの資本主義」という特質は、わが国が産業資本主義の段階に達したころには欧米諸国がすでに帝国主義の段階へと移行しつつあったが故に形成されたものですが、山田盛太郎『日本資本主義分析』など有名な日本資本主義論争から生まれた研究成果でした。

自分自身が2000年4月に所属大学に新設された博士課程を担当するようになってからもアンファンクの教えは心に強く残り、自己流にバージョンアップ（単なる逸脱かも知れませんが）して使わせていただくようになりました。ほとんどが他大学出身の社会人博士課程院生ですが、伝統校OB・OGの彼らでも学位論文の序（序論）、個別論文ならば「はしがき」の部分を記述するときには四苦八苦している様子でした。序や「はしがき」は、研究課題（問題意識）の説明と先行研究レビューから構成されますが、まさに論文の冒頭で書かなければならない研究課題（問題意識）の説明のところアンファンクの教えが活きました。自分の思いだけで書かれたり、経済事象の歴史的経緯だけが細かく述べられたりと様々ですが、アドバイスとして当該分野の研究成果に言及しながら書いてはと勧めたことが一再ならずありました。

先生にお教えを乞うべきことが多く残っています。ご健康を保たれ、末永くわれわれ後進を導いてくださいますようお願いしております。

(2021.8.8 千葉商科大学名誉教授 同政策研究科博士課程客員教授)

直伝の文化経済学を研究・教育に活かす

岩田 均

池上惇先生が米寿をお迎えになり、心よりお祝い申し上げます。誠にめでたうございます。

私が池上先生に直接ご指導をいただいたのは、京都大学3-4回生ゼミ（1969-70年度）と、京都橘大学院博士課程（2003-05年度）の二度にわたっています。大学生のころは紛争の時代でもあり、あまり勉強しない出来の悪いゼミ生でした。

卒業後は京都府庁に勤め、最初に与えられた仕事が中小企業総合指導所における伝統産業の産地診断で、西陣・友禅・丹後などの産地に出向き、職人企業集積地の経営実態調査という仕事の面白さを体験しました。

その後府庁では、農林業・商業・貿易、観光、文化芸術の振興などに携わり、京都府独自の産業政策立案にも関わりましたが、確信が持てる学術的な理論を学びたくなり、池上先生に相談したところ、京都橘大学大学院に文化政策学の博士課程を日本で初めて開設されるタイミングでした。その時に私は既に京都府を退職し、シンクタンクに勤務しながらの修士課程も修了し、星城大学という愛知県の新設大学で職を得ていました。

この星城大学の設立には、京大大学院の修士でお世話になった経営学の赤岡功先生が深く関わっておられ、「文化経済論」などの講義を私が担当することとなりました。つまり、京都橘で池上先生から文化経済学の理論などを直伝していただきながら星城大で講義する、という立場に置かれました。この3年間は、池上先生の講義をメモして私なりの講義として組み立てるため、実に貪欲に学びました。その時に記録に残した「池上先生講義録」は、今では私の宝物＝文化資本となっています。

様々なことを学びましたが、その中から特筆しておきたいのは、ボウモルの理論と固有価値論であり、私の職人仕事論の骨格が形成されました。ボウモルの理論（ボウモル病と外部性）を学び、それを応用すれば、伝統産業の衰退要因とその復活の展望を学術的に解明できることがわかり、学問の力に驚きました。

固有価値（intrinsic value）とは、ラスキンが唱えた life を支える絶対的な力で、享受能力（acceptant capacity）と出会ってこそ真の富となるのですが、池上先生は、この価値論を採用して経済学の「礎石」とし、経済学を基礎から立て直す必要がある、また、固有価値を生かすノウハウの水準が、享受能力の水準と相まって価格を決定すると考えるべきだと、講義の中で話されました。実に重大な提起で、この意味を理解するために格闘する日々が続きましたが、確かに、素材に内在する固有価値を見つけて生かすことが職人仕事の本質であろう、という考えが定まってきました（「職人仕事の本質－仕事による人間の成長－」2009年『立命館経営学』所収）。さらに論考を進めると、人づくり・まちづくり・モノづくり革新への貢献という、職人仕事に内在する多様な外部性＝公共的価値に気づき、職人性に対する社会的再評価の論拠を獲得することができました（「職人仕事は現代産業の限界を突破するカギ」2010年『日本政策金融公庫調査月報』所収）。

このように池上先生の経済学は、社会の編成原理を深部からとらえ直し、新たな見地を私たちに提示してくださいます。その原理が深いだけに、応用できる範囲は広く、様々な問題に対して、新たな改善・解決の方策を考えることが出来ます。この素晴らしい理論を広く社会に普及し、実践に生かして諸問題の解決に役立つことを私の使命と定めて、学び続けてまいります。

池上先生の、ますますのご健勝とご長寿を心からお祈り申し上げますとともに、これからも私どもを末永くご指導くださいますよう、お願いいたします。

(2021.8.8 市民大学院、池上ゼミ)

心に響く言葉「創造の根を発展させる」

井手 芳美

池上惇先生、米寿を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

おめでとうございます。

私が書籍を出版した際に池上先生へ本をお送りしたところ、先生から、励ましたのお葉書をいただきました。

先生にいただいた「創造の根を発展させる」という言葉、今でも心に響いております。ありがとうございます。

先生の優しい笑顔にお会いし、お祝いさせていただきたい気持ちでいっぱいです。

今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

(2021.8.9 働学研、博士課程十名ゼミ)

恩師から学ぶ池上惇先生の魅力と凄さ

程 縁紅

私は、中国鄭州市の出身です。2015年に私費留学生として、名古屋学院大学経済経営研究科修士課程に入学しました、

その時から、十名先生が私の指導教官でした。授業中（修士課程や博士課程）に、池上惇先生のお名前をよくお聞きしていました。池上先生の素晴らしい作品、研究指導力、深い助言、温かい激励など、池上先生のお名前がずっと頭に残っています。

初めて池上先生の作品に触れたのは、2015年のご共著『地域創生の産業システム』です。広く深い見識と政策的提示は、後輩たちに精神的に最も優れた励ましと指導を与えている

と感じました。

私の兄 2 人も、十名ゼミで博士論文を仕上げ、博士（経営学）を授与されきました。私の母はよく、十名先生は素晴らしい、珍しいと言い、3人のわが子を粘り強く指導してくれて、本当にありがたい、と感謝しております、機会があればお礼を申し上げたい、と言います。私の母は、十名先生を尊敬していました。

その十名先生が、池上先生のことを深く敬愛され、よく引き合いに出されます。池上先生はどこまで凄いのか、と感嘆せざるを得ません。

お元気で米寿を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。ますますお元気で活躍されますようお祈り申し上げます。

(2021.8.9 名古屋学院大学博士課程、働学研)

『学習社会の創造』にみる変わらぬ情熱の源泉

加藤 隆

先生が米寿をお迎えになられましたことを心より寿ぎ、変わらぬご活躍に深く敬意を表します。

私は大学ではサークルとゼミが全てで、経済学を体系的に学んだとは決して言えませんが、先生のお蔭で、学ぶこと、仕事をする、生きることを真剣に考えることができたと思っております。

卒業後は京都に住まいしながら仕事にかまけてご無沙汰ばかりしていましたが、退職後短い期間とはいえ、成徳学舎で市民大学院の運営と大学院大学設立認可の業務をお手伝いさせていただき、再び先生のお姿に間近に接する機会を与えられましたことは大変貴重な経験でした。

その当時を振り返ると、私は文部科学省の認可に少し拘り過ぎて、先生のお考えを十分理解できていなかったように思われ、先生の著書『学習社会の創造』を拝読して、改めて先生の今なお変わらぬ情熱の源泉に触れることができたように思います。本来であれば引き続きお手伝いすべきところでしたが、家族の健康上の事情等もあってそれは叶いませんでした。

幸い市民大学院も新しい運営体制が整ったと伺っており、先生におかれましては、くれぐれも健康にお気をつけいただき、これからも末永く、より自由に、そしてゆっくりとお導きくださいますようお願い申し上げます。

(2021.8.9 1974年京大卒 池上ゼミ)

芸術とエシカル消費の出会い

三輪 昭子

池上惇先生、米寿をお迎えになるとのこと、おめでとうございます。

池上先生には直接的な出会いはありませんでしたが、今回の米寿のお祝いメッセージを送ろうと想いをめぐらしてみると間接的な出会いがありました。

私は教育学修士で、修士課程の期間の中で強く印象付けられたものは、学際的な研究の必要性でした。特に芸術に携わる方々が社会を意識して遺す作品の意義を考えることに興味を持っていました。その後は NPO/NGO との出会いから経営学を学ぶ必要性を感じ、独学でしたが企業の社会的責任を中心に学び、研究を進めました。

池上先生との間接的な出会いは、もちろん書籍です。社会科教育学を教育学の研究分野の中心としていた私が初めて手に取ったのは、『文化経済学の進め』（丸善ライブラリー新書、1991 年刊）でした。どなたの手による書籍であるかを考えず興味本位で手に入れた書籍でした。

その書籍を読み進めていた当時から、時代は新しい世紀となりました。21 世紀となった現代、なお一層、池上先生のお考えにある「人と人が身につけたものを大切にする経営学」が必要とされているのではないかと考えます。

私はここ数年、「エシカル消費」と「企業の社会的責任」を関係づけた論文づくりの中にあります。独学で進めてきた経営学の道程に学ぶべきこと、研究すべきことはたくさんあります。いつか、池上先生に注目され、興味を持っていただける成果を出したいと思っています。

池上先生、どうぞ今後もお元気で、健やかなる日々をお過ごしになられるのを希望しています。

(2021.8.9 働学研)

人間の復興と地域の再生の視点をまちづくりに生かす

古橋 敬一

池上先生、米寿おめでとうございます。

地域のまちづくりの現場では、人と社会とその関係をどう読み解き、また紡いでいくのが重要。人々の声なき声に耳を澄ませながら、またその声の意味を探るために、先生をはじめ先達の研究を紐解きながら日々を格闘しております。

経済学の中に、人間の復興と地域の再生を織り込まれようとする先生のアイデアに日々感謝し励ましをいただいております。

これからもますますお元気で、ご活躍を願っております。

(2021.8.10 博士課程十名ゼミ、働学研)

層別研（1960-70年代）から働学研（21世紀）への継承・発展

— 半世紀を経て新たに芽吹く池上さんの思い —

中谷 武雄

1 池上さんとの出会いと層別研の思想

私がやや遅れて大学院に入学した頃は（1972年4月）、大学紛争の余波がまだ燻り、竹本問題などもあり、ゆっくり研究に勤しむというような状況ではなかった。そのうえ周辺には院生運動や社会活動に熱心に参加する人や、奨学金も十分でなくアルバイトに時間を割かねばならない者も多くいた。既婚者もいた。

そうした中で、在学中の5年間をめどに研究力量を身に着け、自立した研究者にどう成長していくか、在学中に論文をどう整え、発表し（発表に至る前に、研究論文の執筆上の作法をどう身に着けるかということ自体が大問題であった）、研究職への就職条件をどう作っていくか（キャリアアップ）、みんな悩んでいた。

講座制のヒエラルキー的な枠内での家父長制的な指導体制（純粹培養、子飼い）か、無責任体制の下での自由放任か、いずれにせよ院生は分断され、孤独であった。研究は個人的営みであり、自己努力によって道を切り開いていかねばならない、今風に言えば自己責任で対処しなければならないという風潮の下で、院生はばらばらになりがちで、自分の専門領域、研究テーマに閉じこもりがちになる。

しかし大学紛争の中で教育改革運動も大学院にまで及び、研究者養成の過程も様変わりを期待されつつあった。研究を個人的営みや個人的業績として私的領域に押しとどめるの

ではなく、社会的に、集团的、共同的に進めようとする雰囲気も息づき始めていた。その基本文書は、森岡孝二（1969, 8）「経済学研究のあり方と民主主義的共同研究体制」（京都大学『経済論叢』104(2)：「経済学のあり方」特集）であった。共同執筆など個人的業績にならないという風潮に、正面から問題提議をした。そして実践が開始されていた。

その根幹にあったのが層別の研究会（層別研）の組織の思想である。同じ年に大学院に入学した院生は、専門、出自、社会的経験、年齢が違っていても、学年別に共同研究会を組織し、恒常的に出会い、議論を重ね、親睦を深める。修士論文、学会発表、研究論文執筆など、研究者養成過程で同じ段階にあり、その段階に固有の同じ実践的課題に直面している者が集まって意見を交流するのが、研究の進展の上で一番刺激的である、というのが層別研を提議した池上さんの持論であった。研究テーマや方法論の親和性、類似性、関連性だけが効率的に研究を深めるのではなく、異分野の、異なった方法論にもとづく意見や考えの交流が、気づきを増やしてくれるというものであった。穴を掘るにも頂を高めるにも、底辺が広いほどスケールは大きくなる。

多様性が創造性の源泉であるというのは現代的な理解となったが、当時は一般的ではなかった。また、研究者として成長していく上での段階的に特有の実践的課題（サバティカル・留学や昇任、教育改善や学生指導、学位論文など、就職後も同じである）を共有していることが、一番大きなエネルギーを発揮する、という考えが明確である。同学年が中核になるが、一定規模を実現するには、前後の学年にも参加を呼び掛けるので、同期会の幅を広げて前後も含めるということで、研究者養成過程で同じ段階、境遇にある者どうし、という層という概念を確立し、その集団で研究会を組織するというのが、層別研の趣旨である。

個人的には未熟な研究者ではあっても、集団で、共同で対処することが層では可能となる。発達段階の相違がまた創造性の源泉となる。複数で労働組合や市民団体の講演会や学習会に、報告者やチューターとして出かけていくことも可能となる。共同執筆で1冊の本を刊行するなどという企画は、典型的な場面であろう。

大学院に入学して、私たち同期生も層別研を組織し（逍遙会）、研究意欲を高めあった。大学院修了後も研究会継続とまではいかなかったが、交流は現在も続いている。

2 働学研のエネルギーと臨界点の有効な突破を

働学研に参加して印象に残るのは、十名さんの獅子奮迅の奮闘である。全精力を傾注しと言いたいところだが、まだまだ見えていないところでのその他の部分もあるようで、働学研への適格で、丁寧な対応だけでも舌を巻く、としか言いようがないエネルギーが秘められている。

思うに、初めての社会人院生という体験が、同じ境遇で不安を抱いている人と出会い、彼らともに研究者へと変身していった過程が、層別研の思想を実践していたといえるのではないか。前任校での社会人院生・研究者の受入れ、育成の経験が確信となって、働学研という前人未到の、賞賛すべき研究教育活動が制度化され、緒に就いたといえるであろう。

ここまで精力を割くことができるのは、参加者のあくなき学習・研究意欲を背景として

のことであろう。参加者が博士論文を仕上げる、単著をまとめるという強い意志を共有していることが重要である。研究者として成長過程で同じ段階にあり、同じ実践的課題を持って参加する。相互にその立ち位置と課題を理解しているから、その目標達成のための各自の意欲が伝わり、努力の過程が理解でき、相互に成長を尊重しあうことが可能である。各自の研究が前進し、議論が盛り上がるのであろう。

その基本的原理は、層別研の現代版、ICT、デジタル化の推進のもとでの進化版といえるのではないだろうか。オンラインによる研究会には、文字通り世界から、いろいろな職業や年代の人が、あらゆる問題意識をもって、様々な専門分野のテーマで、関心をもって参加する。多様性が爆発的に拡大し、ばらばらの集団のように見えるが、論文執筆、単著出版という目的意識が共有されている。これが、他の研究者集団とは異なる独自性であり、強みでもある。

発達中の若手研究者が異なった段階にあるのと同じように、自ら個人研究を発表しながら他の研究発表にアドバイスもするという、指導的役割を担う（とされる）参加者も多種多様である。この場で学位を取得したほやほやの博士若手研究者から、退職後の学位取得者まで、様々な層が様々な関心をもって参加して、同じ立場で自由に議論を重ねている。多様性の幅はずっと広がっている。

層別研の現代版である働学研では、層別研のメリットが倍加されている。毎回や連続というわけではないにしても、同一人物によって同じテーマが語られ、継続されているので、個人研究が発展していくことが実感できる。したがって熱意をもって準備、参加する。毎回議論が盛り上がり、熱心な人は録画で復習し、再確認もする、個別にメールをやり取りして深めていくこともできる。成果が蓄積されることは確実である。オンラインでの資料交流も手探りで進められてきている。

多様性が多産であるということが実証され、その認識も浸透してきている。専門性が分化し、細分化すれば、個別性を高めることが重要であるという考えも普及する。デジタル化が進んでも対面の、相対、個別・少人数教育は不可欠であるという考えやそれを重視すべき領域は残るであろう。しかし（異分野）交流、シナジー効果など、幅を広げる姿勢や方法がさらに重要となるであろう。（「生産性」、「生産力」、を高める？）

社会的な実践に裏づけられた情報、情報財の組立て、組み合わせ、いわゆるキュレーションといわれるミクロレベルと、デザイン（構想力、テオリア）と呼ばれるマクロレベルでのそれぞれの議論と、両者を接合しようとする議論が談論風発というべき状況で展開されている場として、働学研が継続し、発展していくことを期待している。蛇足ながらつけ加えると、最適規模（最適均衡？）は状況に依存するであろうが、働学研の毎回の参加者は50名を目途に発展するのではないかと思われる。

貴重な体験が流布され、浸透していくことを期待している。楽しみと期待を持って働学研に参加していきたい。

(2021.8.10 市民大学院)

知的刺激と激励、「一筋の光」に導かれて

古河 幹夫

京都大学大学院では大変お世話になりました。他大学から進学した身には、池上ゼミでの議論は知的刺激に富み、世界は変えられるとの希望を感じることができた幸せな時期でした。

長崎県立大学（佐世保）に就職してからは、お目にかかる機会は僅少でしたが、折にふれて手紙・葉書で励ましていただきました。京大とは環境が大きく異なる地方公立大学でも、世界を認識しより良い生への知的刺激あふれる大学にしようと努力してきました。

情報が多すぎて世界の行く末に展望が持ちにくいなか、一筋の光を求め拡げてこられた池上先生のお仕事は、常に仰ぎ見るばかりのものでした。私も自分なりの一灯を求めてまわりたいと思っています。

(2021.8.10 長崎県立大学名誉教授)

内モンゴルに生きる「4世代にわたる学びの絆」

白 明

88歳のお誕生日おめでとうございます！そして節目の米寿を迎えられました事を心よりお祝い申し上げます。

日本にいた頃先生にご指導していただいたことを胸に、今自分の生徒にもその働学研の楽しさと重要性を伝えており、4世代にわたる絆として活用させていただいております。

これからも益々のご健勝で、ご活躍をご期待申し上げますとともに、今後ともご指導のほどお願い申し上げます。お体を大切に、今後も元気で、新しい歴史を刻んでください。

(2021.8.11 内モンゴル民族大学 十名ゼミ)

論文指導と日本経営学へのお導きに感謝

中野 健一

米寿を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

池上惇先生には、毎月一回、論文の指導を通じて、学術面だけではなく、人格面でもご指導を頂きました。教育者として、為すべきことを教えて頂きましたことは、私の人生上での大切な道しるべとなっています。特に、偉大な先人研究者と時間を過ごされてきた先生だからこそ、お話頂けるエピソードの数々に、毎回、先人研究者と池上先生の志の高さに身が引き締まる思いでした。

先生にお導きを頂き、日光の二宮神社の書庫にある報徳全書を調べる機会を頂きました。1万巻という量に圧倒されつつも、一冊一冊に手書きで記された一文字一文字に、先人が後世に残し伝えようとする意志が込められていることを体感しました。現場に赴き、フィールドワークを誰よりも実践なさっている先生の教えから、肌感覚で学ばせて頂く貴重な機会となりました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この度は、米寿を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。今後も、益々健やかで、元気でいらっしやいますようお祈り致しております。

(2021.8.10 市民大学院)

恩師に導かれての学び・仕事・研究人生

戸崎 肇

池上先生、米寿おめでとうございます。

私が初めて池上先生のお姿を拝見したのは、京大経済学部の入学式が終わった後に開催された、新入生と教員との茶話会の場でした。池上先生が近くの席におられ、途中で立って少しスピーチされました。直接お話する機会はなかったと思いますが、その時、先生のこと強く印象に残りました。

その後、3年生になってゼミを選ぶ際、専門のことなどほとんど考えることなく、迷わず池上ゼミの入室選考に臨みました。私は体育会に所属し、ほとんど大学にいかなかったので、専門のことなどほとんどわかりませんでしたし、勉強しようともしませんでした。ただ、入学時の印象が強かったのです。そして、高校の先輩がゼミ生としておられたこともあり、幸運にも池上ゼミに入ることができました。

とはいえ、その後もゼミ生としては足を引っ張るばかり。なにせ2年間の基礎が全く抜

けています。それに周りは秀才ぞろい。教科書を読んでもよくわからず。インゼミでは本当に何とか参加させていただいたという程度でした。それでも池上先生は見捨てることなく、ゼミ生の一員として扱ってくれました。

3年生の後期のこと、あるプロジェクトで海外に3か月派遣されることになりました。期間は12月から3月まで。後期試験は全く受けられません。当時の京大の単位取得が学生にとって「優しい」ものだったとはいえ、できれば少しでもどうにかしておきたいもの。そこで、出発前、いろんな先生にお願いに参りました。池上先生にはさすがに恐ろしくて頼みにいけなかったのですが、帰国後、何時まで経っても池上先生の試験の合否だけが発表されません。もしかしたらまだ間に合うかもしれないと思い、恐る恐る池上先生にも頼みに行ったのですが、「それを待ったんや」といってレポートを書かせていただきました。無事単位を取得できたのでした。

卒業後は、優秀なゼミ生とは違って、専門とは関係のないJALという会社に就職しました。時はバブル。なかなか社業に生き甲斐を見出せず、入社3年目に池上先生に相談に行きました。そうすると先生は直接それに対するお答えはされず、今度京大に社会人大学院ができたので、あんたも来ないか、といわれました。その時はあまりピンとこず、あろうことか、その後半年くらい、そのことは念頭にありませんでした。ところが、大学院入試が迫ってきたある日、先生から入試の参考となるような本が数冊送られてきました。これはまずいとにわか勉強。これも何とか運良く合格し、その後博士号の取得までつながっていきました。

大学院時代の思い出としては、先生が、非常に体調が悪いのにも関わらず、社会人のためのゼミを開催され、机に突っ伏しながらも院生の発表をお聴きになり、コメントされていたことです。横ではらはらしながら見ていました。

その後、私も縁あって、大学の教員となりました。あの落ちこぼれが、何とかいっぱしものとして生きているのも、全て池上先生のおかげです。しかも、現在でも身近に接しただけでいることも奇跡のようなものだと思っています。これからもどうかお元氣でご活躍ください。そして、こちらも少しでも恩返しができますよう努めます。

(2021.8.10 桜美林大学)

「個」に向き合う教育&研究指導を糧にして

菊地 裕幸

池上先生、米寿おめでとうございます。直接お目にかかってお祝いを申し上げられないのは残念ですが、先生がお元気で米寿を迎えられ、これほど喜ばしいことはございません。

私は1991年4月から池上ゼミに入りました。当時、硬式野球部のマネージャーをしていたこともあり、成績も悪く、ゼミもさぼりがちな落ちこぼれ学生でした。そんな私をゼミ生として受け入れてくださったのみならず、長年にわたってご丁寧かつ親身なご指導により導いていただき、おかげさまで曲がりなりにも研究者を続けることができております。先生からの大恩は本当に感謝してもしきれぬものではありません。改めまして深く感謝申し上げます。

先生からのご薫陶は30年以上に及びますが、その中でも特に福井県立大学大学院修士課程の2年間と、京都橘女子大学文化政策学部でTAを担当させていただいた2年間は、先生のお傍で学ばせていただき、濃密なご指導を賜ることのできた、かけがえのない至福のときでした。

会社員時代、突然先生にメールを差し上げ、会社を辞めて先生のもとで学ばせていただきたい旨お願いしたところ、先生からは「退路を断って大学院に来るのも大いに結構だが、今は社会人大学院の道も整備されているので、仕事をしながら学ぶことを考えてもよいのでは」というご返事をいただきました。結果的に私は会社を辞めて先生のもとへ転がり込んだのですが、先生は嫌な顔一つせず、おおらかに私を包み込んでくださいました。これ以降、私の人生は神様と池上先生のお導きにより、大きく転換していったのです。

大学院での学びは大変刺激的で、充実したものでした。それは言うまでもなく池上先生がご丁寧かつ熱心にご指導してくださったおかげなのですが、例によって私を大げさに褒めて、やる気にさせてくださったということも大きかったように思います。研究テーマは先生からシジウィックをご紹介いただき、先生のご指導のおかげで優秀論文賞をいただくことができました。博士課程においても引き続きシジウィックの研究を行い、「シジウィックの租税思想と分配政策」というテーマで学位を取得することができました。ただ、その後、現代財政や地域経済の方に関心が移ってしまい、いまだシジウィックの研究を取りまとめて公刊することができておりません。先生にはそのことが大変申し訳なく、忸怩たる思いでいっぱいです。博士の学位を取得して15年以上経ち、以前よりも大局的な見地からシジウィックの思想の意義を捉えられるようになってきたと感じておりますので、一刻も早くシジウィック研究を取りまとめて著書として公刊し、先生に謝辞を捧げることができるよう、より一層精進したいと存じます。このことを、この米寿の喜ばしい場をお借りし宣誓させていただきます。

TAとして京都橘女子大学にかかわらせていただいた2年間は、研究面のみならず教育面でも大切なことを学ばせていただきました。先生は講義終了後、学生達に毎回、要約と感

想を書かせ、それを一枚一枚読んで添削した上で翌週返却していました。大先生から直筆のコメントをもらえるだけでも学生達は大喜びでしたが、そのような双方向教育により学生一人一人に向き合うやり方は、学生の学習意欲を大いに促進し、理解力や文章力も格段に向上させる結果を生み出したのです。これを毎週、しかも 200 名以上の学生に対して添削を行うわけですから、その費やされた時間と労力には凄まじいものがあったと拝察します。私達 TA も毎回 20~30 枚程度、添削を行っていたのですが、その程度の枚数でもヒイヒイ言っていました。しかも池上先生は橘女子大学赴任の直前に脳梗塞で倒れられ、奇跡的に回復を果たされたものの、復帰直後から学部長職をはじめとする激務をこなされていたわけですから、いつまた体調を崩されないかとハラハラしながら見ていたものです。文字通り、命を削って、精魂込めて、教育研究に打ち込まれていたのです。

それほどまでに一人一人の「個」に向き合い、凄まじいまでの情熱を注がれる先生のご姿勢は、もちろん当時もそうでしたが、個性重視の教育が重視されつつある近年の方が、その尊さをより強く実感できるように思います。先生には遠く及びませんが、せめて先生を見習って少しでも近づけるよう努力しなければ、と日々自戒しているところです。ちなみに、橘女子大学での TA 時代には、池上先生は青木先生や中谷先生、阪本先生、私達 TA、そして学生達とともに京都の社寺を散策したり、大文字山に登ったりして交流を深められました。あの日々も懐かしく、楽しい思い出の一つとなっております。

これまで池上先生のやさしさ、大きさにつつい甘え、いつもおすがりしてきましたが、そんな私も 50 歳を過ぎてしまいました。「四十にして惑わず」、「五十にして天命を知る」と言われますが、私はまだまだ日々惑い、天命の「て」の字すら理解できない未熟者です。

これからは、しっかりと自立し、これまでとは逆に池上先生をお助けし、これまでの御恩を少しずつお返しして…と言いたいところですが、この未熟者、まだまだ先生に頼らずしては研究者として十分な成果を収められず、人間としても全うな道を歩むことができそうにありません。

先生には引き続き、厳しくも温かい叱咤激励、御指導御鞭撻を賜るべく、末永くお元気で過ごしていただきますよう、どうかどうか、よろしく願い申し上げます。

この度は、米寿をお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

(2021.8.10 池上ゼミ)

貴重なご指導を出版に活かす

高松 平藏

米寿、おめでとうございます。

生意気盛りの四半世紀ほど前、文化経済学に関するご著書を拝読し、仕事を理由に連絡を差し上げ、京都でお会いいただいたのがきっかけだと記憶しております。仕事を装ってはいたものの、随分失礼なことを申し上げたかもしれません。

それにしても以来、3～5年ごとにお目にかかることがありましたが、数年前に論文のご指導をいただくようになったことは私にとって、ちょっとした「事件」でした。というのも私には特定の師のような方がいなかったからです。それだけに御指導いただくこと自体が嬉しく、いただくアドバイス一言一言が自分自身の「知」を測る指標でした。すなわち、(1) 文脈に沿った十分な理解をしているか、(2) 次に書くものに反映できるか、(3) 反論や批判ができるところまで咀嚼できているかという3点です。

3番目まではなかなか行き着くことができないのですが、アドバイスとしていただいたメールを読み返すことが今でもあります。

さらに嬉しかったことは、御指導いただいた論文を拙著の一部に盛り込んだこと。そして、出版記念講演にまでお越しいただいたことや一文を寄せていただいたことでした。しかし、この文章に対しても(1)から(3)の思考をする羽目になりました。先生から頂く言葉は実に困ったものなのです。

もとより、知見は社会に広く還元したいところです。その知見を高めるために、先生との出会いはとても大きなものになりました。これからもご指導いただけると嬉しく存じます。いつまでもお元気でいらしてください。

(2021.8.12 ドイツ在住ジャーナリスト、働学研)

「マルクス・レーニン主義」にたどりつけた幸せ

— 池上 惇さんの導きに感謝 —

藤岡 惇

「多くの人が同じ夢をみるようになる時、夢は現実となるでしょう」(オノ・ヨーコ)

かつて「マルクス・レーニン主義」(ボルシェビズム)と呼ばれる潮流がありました。軍队的な規律にもとづく「前衛党」を築き、その力で生産力を形成できれば、資本主義が未

発達した国であっても、資本主義を越えた理想社会を築くことは可能だと説く潮流でした。

50年前の話です。私が20歳の頃、京都大学の経済学部や大学院の場で親しんできたのは、この種の考え方でした。「マルクス・レーニン主義」の考えに囚われた人々は、その後閉塞し、影響力を失っていきました。

幸い私の場合、比較的早い段階で「マルクス・レーニン主義」の呪縛から脱却できました。米国の公民権運動を探究するなかで、「非暴力的で穏健な（一定期間は国家や資本の善用を許す）アナーキズム（協同組合主義）の潮流——キリスト、トルストイ、ガンジーから宮沢賢治、ノーム・チョムスキー、ジョン・レノンに至る潮流に関心をいだき、マルクス主義とアナーキズムという2大潮流の高次統合を試みてきたおかげです。

後者の潮流をジョン・レノンに代表させましょう。「マルクス・レーニン主義」から「マルクス・レノン主義」への脱却というのが、わが半生のテーマとなったのです。とはいえ「レーニンのレノンへの脱皮」というのは容易な課題ではありません。ガンジーはソ連の体制とは一線を画していましたが、宮沢賢治のばあいも、レーニンの「国家と革命」を読んだ後に、「これはダメですね。日本に限って、この思想による革命はおこらない」と述べていたそうです（大内秀明『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論——土着社会主義の水脈を求めて』2020年、社会評論社、150ページ）。

「レーニンからレノンへの脱却」プロセスで、導き手となったのは池上 惇さん。1995年に発足した基礎研の「自由大学院」がその舞台となりました。

①憲法を暮らしに生かす運動、②労働者と知識人の同盟の思想、③『資本論』学習の伝統を基礎研運動の3つの源泉だと池上さんは指摘していました。「人間発達の経済学というのは、・・・捉え返しの経済学。・・・基礎研とは労働者が科学や知識を自分自身に取り戻す・・・試みです」とも述べています。

最近、日本共産党の社会科学研究所が音頭をとるかたちで『資本論』の新訳が出されました。①生産力と生産関係の矛盾、利潤率の傾向的低下、恐慌といった経済現象に、未来社会への変革契機を求めるのは正しくない。政治、社会、自然といった領域にも視野を広げないと、変革主体の形成を追求できないこと。②工場法など、経済民主主義の実現を通じた「ルールある経済社会」の形成こそが、「未来社会」にいたる大道であること。③自由な時間の潤沢な創出を、マルクスは未来社会づくりの核心に置いていたこと。

「潤沢な自由時間」の創出を、森羅万象（動植物、山河、文化遺産）のなかにケアの主体性を見出す新たな「ケア文明」の展開と結びつけて欲しいところですが、それは望蜀の願い。いずれにせよ、「資本論」を修正資本主義＝経済民主主義的改革の導きの書として読み直すべしと呼びかけられた池上さんの天才的な着想が結実し、大きな花を咲かしたわけです。

3年前に基礎研は創立50周年を迎えました。記念講演に立たれた池上さんは、イタリアの革命家アントニオ・グラムシから学ぶ意義を強調された。グラムシは、こう述べています。「知識人は考えることは出来るが、感じることは出来ない。民衆は感じることは出来るが、考えることは出来ない。知識人はもっと感じ、民衆はもっと考えよう。『知識人と民衆との弁証法』を介して、大量の『有機的知識人』が生まれる時、壮大な歴史の変革が始ま

る」と。「イノチ輝く市民科学者への成長」を使命とする基礎研や市民大学院の魅力の源泉をずばりと言い当てておられますね。

たしかに新自由主義の制覇の時期には、マルクス評価や大学改革への「対応」をめぐって、複雑な問題があったことは否定できませんが、新自由主義の否定面が全面化してきた今日、池上さんとの共通項がぐんと広がってきた気がしています。

最近、2冊の本を読みました。一つは、ブレイディみかこ『他者の靴を履くーアナーキック・エンパシーのすすめ』。もう一つは、ルトガー・ブレグマンの『ヒューマンカインド 希望の歴史ー人類が善き未来をつくるための18章』。いずれも文芸春秋社から1か月前に刊行された本。穏健なアナーキズムに立脚する良書です。人類史の99%を占める原始共産制時代の「イノチ輝く人間発達」の姿をアナーキスト人類学は盛んに発掘しています。「マルクス・レノン主義」に立脚するアナーキスト経済学を創造するという課題で、協力できることを願っています。

(2021.8.13 基礎研元理事長&働学研、働学研)

徳島県上勝町での現地指導と拙著への評価に深く感謝

松本 竹生

この度は、池上先生米寿お祝いのご案内ありがとうございます。

池上先生への御礼は、とうに過ぎてしまいましたが、これは十名先生への御礼です。先には先生の御著書をお送り頂くなど大変ありがとうございました。

小生は年を経て大学院に進みましたので、中谷先生、池上先生をはじめたくさんの研究者の皆様にお世話になりました。指導教授の中谷先生には格別のご指導・お世話になりましたが、池上先生には、小生のフィールドでありました上勝町（徳島県勝浦郡）の集落にも数回お越し頂きご指導賜りました。以後においても、小生のつたない書籍に過大な評価を頂き、未知の方からの照会も頂きました。

今回のオリンピック開催の是非はともかく、若いアスリートがメダルを獲得した栄誉にも似た感じです。

私の関心分野は常に中山間や僻地です。そこには年齢を超えた（むしろ高齢者ばかりの）生活圏があるようにおもいます。池上先生の米寿をお祝い申し上げますとともに、これからもご指導賜りますようお願い申し上げます。

田舎の徳島にも、コロナが蔓延気味です。先生には十分にご自愛ください。

(2021.8.13 京都橘大学大学院文化政策学研究科修了)

伝統産業研究へのご指導を博士論文&後進育成に活かす

安嶋 是晴

この度は、謹んで米寿のお祝いを申し上げます。ますますお元気で長生きされますよう、お祈りいたします。

先生との出会いは、1999年に福井県立大学大学院修士課程でした。8年間の社会人を経て大学院に進学し、研究の世界の右も左もわからない状況の中、2年間ゼミナールで懇切丁寧にご指導をいただきました。当時の同期ゼミ生は8人程度で、個々の興味のある多様なテーマで修士論文に取り組んでいましたが、我々の稚拙な発表を様々な角度から肉付けしていただく知識の泉は、まさに博覧強記、人間データベースでした。

私の修士課程の研究テーマは非営利組織だったこともあり、先生が提唱した「研究支援NPO」の設立に手伝わせていただきました。このNPOは、広く市民から寄付を集め、研究支援を行い、その成果を出版して印税を獲得し、さらなる研究支援を行うという、知識とお金の循環機能を担うもので、実際に数冊の出版を行い、研究支援を行ってきました。現在は、福井県立大学の山崎茂雄先生が理事長として活動を引き継いでおられます。

修士2年の12月、先生が脳梗塞で倒れられ、当時はお話ができない、身体も動かないとお聞きし、大変心配いたしました。が、劇的な回復をされました。倒れられた直後、修士論文の提出締め切りが迫るゼミ生のために、京都橘女子大（現京都橘大学）の阪本崇先生に指導を依頼され、当時はオンラインなどもなく、京都から福井に何度もご足労いただきご指導いただけたことも懐かしく思います。

その後、福井県立大学の博士課程に進み、働きながら学ぶことを続けてまいりました。研究支援NPOの設立のご縁で、福井県の公設NPOセンターに2年間勤務し、その後、輪島商工会議所で伝統産業や観光振興などの仕事に3年間従事した後、縁があつて金沢大学に助手の職を得ました。輪島の伝統産業について論文を書き続け、池上先生の文化政策・まちづくり大学校での研究会にも参加し、伝統産業に造詣が深い岩田均先生や十名直喜先生とも知り合うことができました。

2016年に金沢大学から富山大学に異動し、2020年にはこれまで書き溜めてきた論文を「輪島漆器からみる伝統産業の衰退と発展」と書籍とまとめ、福井県立大学から論文博士を取得しました。出版の際、先生には無理を申し上げ、帯を書いていただきました。十名先生にも貴重なコメントをいただきました。

先生との出会いは、私の人生にとってかけがえのない宝物を与えていただきました。多くの知識や人のご縁をいただけたこと、なにより人としての生き方を学ぶことができました。この蓄積された文化資本を活かし、今後の研究・教育活動に尽力してまいります。

この度は本当におめでとうござります。

(2021.8.14 富山大学芸術文化学部)

池上先生との思い出

外山 晴一

私は1968年4月から1970年3月の2年間、池上ゼミに在籍して池上先生からご指導いただきました。ゼミを選ぶ時の判断基準は、当時の池上先生は一番若く、且つ戦闘的なマルクス経済学者だったとの評判からです。私は本年74歳ですが、この歳まで恩師がご健在でいまだにご指導いただけるというのは大変な幸せです。私は地元の同人誌に「フリーメーソンと日本」というタイトルで連載寄稿していた文章をまとめて小冊子にしようと池上先生に相談したところ、アドバイスをいただいた上に解説文まで書いていただきました。本当にありがたく、幸甚に思った次第です。

私が池上ゼミに在籍していた時は学生運動が最も盛んな時で京大の本部時計台も東大の安田講堂や全国の大学同様に一部の学生に占拠され、1年近くに亘って大学は封鎖されていました。卒業アルバムを見るとゼミもゲバスタイルで参加していました。そのような荒れた環境でしたが、池上先生のマルクスの資本論解説は私のその後の人生の骨になっています。私は新潟県三条市で金属関係の製造卸をやっておりますが、倒産せず現在500人位の社員がいる企業グループになっておりますのは池上先生のご指導のお陰と厚く感謝しています。

池上先生が今後ともお元気で益々ご活躍されますことを衷心より望んでおります。

(2021.8.14 池上ゼミ 1970年卒)

大学院生時代からの交流、素晴らしい時間に感謝

和田 幸子

池上さんは、私の大学院生時代から、ずいぶんお世話になった先輩です。

あの、若い日々、研究会やお宅にも伺って、奥様や令ちゃん共々、あれこれお話を聞いて頂きました。

忘れられない素晴らしい時間でした。

あの日に還ることが帰るできたら・・・などと想います。

ズ〜っと感謝申し上げます。有難うございました。

(2021.8.18 基礎研常任理事)

<答 辞>

— 学部ゼミを原点に半世紀を超える学び合いの交流に感謝 —

池上 惇

ご返信、有難うございます。

また、記念の日にと、ご多用中にもかかわらず、メッセージ集まで、ご編集いただき、感謝のほかなく。

私の感想を、とのことですが、各位から、過分のご評価をいただき、ひたすら、感動あるのみです。

これまでの、学習社会への道につきましては、働きつつ学ぶ、すべての市民に、創造と享受の機会を生み出そうと努力し、個性の共生、ハーモニーを目指してきました。

そのためには、お一人お一人が自由に、さらに、互いに、敬意をもって対話し、学びあい、育ちあえる場が是非とも必要ではないか。このような場を創り上げてこられた方々を発見して、その場から、学び続けよう。このように考えておりました。

このような場として、最初に経験しましたのは、京大の経済学部、学生ゼミナールでした。当時の私は、お説教の癖が抜けずに、しゃべることが多く。

しかし、学生諸君は、「それではだめですよ」と教えて下さいました。「聞くことから始めては」というご提案でした。そして、わたくしは、次第に、お一人お一人のお話を交流できる、プラットフォームのような存在を心がけるようになりました。

過分のご評価をいただいておりますが、わたくしの原点は、ここにありまして、その意味では、当時の学生諸君なくして、今の私はないことになりましょうか。

以後、保育所づくりからはじまって、大学教師としましては、実に、多様な機会に恵まれました。これらは、「ともばたらき」と「教育機会」のお陰です。

また、大学院生が多く、集まってくださったので、学会も、たくさんつくりました。すべて、みなさまのご配慮によるものです。

その意味では、お礼を申し上げるのは、わたくしの方でして、皆様方のご厚志に対しまして、厚く御礼を申し上げます。敬具

(2021.8.12)

2021年8月15日

編集後記

池上惇先生の米寿お祝いメッセージ集の企画・編集を思い立ったのは、7月半ばのことです。米寿祝賀会（8月21日）に向けて、岩手県関係者（遠野市、住田町、大船渡市など）30名余がお祝いメッセージを寄せられている、とお聞きしました。

そこで、それ以外の地域でもつくろうと、立ち上がった次第です。

残り時間も限られているゆえ、いろいろと働きかけも行いました。まず7月17日、働学研（博論・本づくり）研究会の2周年記念企画として、お祝いメッセージの寄稿を働学研会員に呼びかけました。続いて、国際文化政策研究教育学会、基礎経済科学研究所にも共有メールを通して寄稿をお願いしました。

7月24日開催の第23回働学研では、「池上先生との交流や思い出を語り合う会」を特別企画として急ぎよ織り込みました。座談会には20名の方にご参加いただき、各位の体験や思いを語っていただきました。また8月初めには、『国際文化政策』第12号が郵送される際に、寄稿呼びかけ文も同封していただきました。さらに個別に直接、寄稿をお願いした方もおられます。

8月15日までに、40名（学会員他14名、働学研26名）からお祝いメッセージを電子メールでいただいています。発信先は日本各地および中国、ドイツから、お歳は20歳代から米寿を越えられた方まで、交流期間は数ヶ月から数十年にまたがり、間接的な交流の方まで含まれています。

編集の仕上げにあたっては、「発刊の辞」（中谷武雄）、「答辞」（池上惇）を急ぎよお願いし収めることができたのは、望外の幸せといえましょう。

メッセージを機に、新たな交流も生まれています。タイトルがなくて、ご相談したり適当に付けたりしたメッセージもかなりあります。執筆者の所属 or 出身については、重なることも少なくなく、ご提示がない場合は適当に付けています。

各位のメッセージから、仕事・研究・人生におよぼしたインパクトの深さ、大きさ、そして池上先生の思いやり・度量が浮かび上がってきます。ドラマの数々が紡ぎ出され、助け合い学びあいの交響曲が奏でられています。

米寿の祝賀会、そしてお祝いメッセージ集のいずれも、一種の「生前葬」ではと感じています。実は、小生も生前葬をすでに済ませています。定年退職直前の最終講義（2019.1.11）には家族なども呼び寄せ、生前葬に見立てて行いました。わが人生のケジメの1つにもなっています。

米寿のお祝い（そして「生前葬」）を機に、池上先生が百寿に向かって大道を歩まれますよう祈っています。

（編集担当 十名 直喜）

池上 惇 先生 米寿お祝いメッセージ集

企画・編集 働学研（博論・本づくり）研究会

2021年8月18日 発行

発行所 国際文化政策研究教育学会

600-8433 京都市下京区高辻通室町西入繁昌町 290（旧成徳中学校 2F）

郵便局払込口座 009703-288763 国際文化政策研究教育学会

銀行口座 京都銀行山科中央支店（普）3614696 国際文化政策研究教育学会:

印刷所 一般社団法人文化政策・まちづくり大学校

600-8433 京都市下京区高辻通室町西入繁昌町 290（旧成徳中学校 2F）